

再刻
日本立志編

一名修身規範
千河岸貫一著述

二

瀋陽第一師範學校
(學校圖書)

書名	日本倫理學
編者	貫一
冊數	1
分類	倫理學
登錄號	150.118

正修

記

T1A1

22

C 43



a 1 3 8 0 3 2 1 7 4 5 a

福岡教育大学蔵書

日本立志編卷二目次

養志ノ部

志ヲシテ恆ネニ存セシムルハ身ヲ立ツルノ基本ナルヲ叙ス

第一 源義家兵法ヲ學ヒシ事

第二 越前以將舞ヲ觀テ號泣セラレシ事

第三 中江藤樹大學ヲ讀ムテ嘆悟セシ事

第四 長沼宗敬儒學ニ志シ兵學ヲ窮メシ事

第五 熊澤了介學ニ志シ良師ヲ求メ大ニ其業ヲ成

スニ至リシ事

第六 岡崎季民志ヲ隣家ノ弦聲ニ激勵セシ事

第七 谷松三介勤苦志ヲ求メシ事

第八 新井君美貧ニシテ志氣ヲ撓屈セザリシ事

三十二

第九 三宅正名同九十郎貧ニシテ苦學セシ事 三十三

第十 物徂徠遠志ヲ抱キ一代ノ儒宗タリシ事 三十四

第十一 雨森芳洲年八十一始テ和歌ニ志セシ事 三十五

第十二 太宰純管麟嶼ニ規セシ文 三十六

第十三 吉益東洞貧窮ニシテ毫モ志ヲ折カザリシ事 三十七

第十四 松山某明ニ失シテ學ニ志シタル事 三十八

第十五 谷玄圃明ヲ失シテ後テ詩學ニ志セシ事 三十九

第十六 後久開彦四郎年卅六ニシテ學ニ志セシ事 四十

三十五

第十七 小川信成勸學文ヲ臨摸シテ學ニ志セシ事

三十六

第十八 山中精平告クスシテ桑梓ヲ離レシ事 三十八

第十九 石作貞十九ニシテ始メテ學ニ志セシ事

第二十 田邊希文孟子ヲ講スルヲ聞キ志ヲ立テシ事 三十九

四十

第二十一 永富鳳介幼ニシテ古人ノ節ヲ慕ヒシ事 四十一

第二十二 宮瀬維翰乞食シテ江戸ニ入リシ事 四十二

第二十三 富士谷成章志ヲ專ラニシテ國書ヲ討究セシ事 四十三

四十四

第二十四 藤鈞篤生ノ妙訣ヲ自得セシ事 四十五

第二十五 休翁晚年國歌ニ志セシ事 四十六

第廿六 糟谷牛之丞篤志ニ由テ國風ニ長セシ事 聖元

第廿七 佐藤隆岷葵章ノ衣ヲ被ルヲ誓ヒシ事 五十二

第廿八 山階純一即志ヲ繪法ニ專ラニセシ事 五十三

第廿九 藤田斌卿年弱冠ヲ踰エテ學ニ志セシ事 五十四

日本立志編卷二

千河岸 貫一 撰述

養志ノ部

志ヲシテ恆ネニ存セシムルハ身ヲ立ルノ基本ナル
コヲ叙ス

凡ソ人ノ爲スアル、必ズ先ツ之ヲ爲スノ前ニ當テ、將サニ
之ヲ爲サントスルノ志アリ、苟モ其志無キ、恰モ穀ヲ設ケ
ズシテ射ルガ如シ、而シテ其志ス所卑近ナル者ハ、其至ル
所亦卑近ニシテ、其志ス所高且ツ大ナル者ハ、其達スル所
亦高且ツ大ナリ、故ニ古來有爲ノ士ハ、必ズ少ニシテ高遠
ノ志ヲ懷キ、終ニ常人ノ到ル能ハザルノ地位ニ達ス、然レ
バ則チ人間百ノ事業、志ヲ以テ基礎トセザルハ無シ、殊ニ

惟ム今世ノ人士志嚮先ヅ定ラズシテ、或ハ製造物産ヲ興殖セントシ、或ハ商估貿易ニ從事シテ利ヲ得ントシ、或ハ文章議論ヲ以テ一世ニ鳴ラントシ、朝夕ニ孜々スル所ノ事モ、タベニ己ニ之ヲ厭棄シ、昨ノ敢テ顧ミザリシ所モ、今ハ頗ル思念ヲ傾ク、是恰カモ基礎無キノ建築ノ如シ、假令結構宏大ナリト雖、忽チ風雨ノ爲メニ傾覆シ破壊セン、夫レ人ノ志ハ、之ヲ養ハザレバ長ゼズ、況ヤ社會ノ風潮ニ簸蕩セラレ、其志ヲ挫折スルヲヤ、嫩芽ヲ摘盡シテ、其艸木ノ長生ヲ望ムト何ゾ殊ナラン、而シテ志漸ク長大ナルニ及テハ、勢力當ル可カラズ、三軍帥ヲ奪フベシ、匹夫其志ヲ奮フベカラズトハ、此之謂ナリ、且夫世人ガ動モスレバ、眼前ノ小利ニ眩シ、小安ヲ謀リ、終ニ小成ニ安ンズル者ハ、他無シ、或時ハ高遠ナル志ヲ起スアリト雖、其久シク之ヲ保持セザルニ坐スルノミ、其心ニ於テ、大ニ欲スル所ノ者アツテ存スレバ、何ゾ區々タル利益ト、快樂トニ拘泥スルニ暇マ、アランヤ、而シテ其志ヲ保持スルニ就テハ、其眼ニ遮リ、其耳ニ觸ル、所ノ者ヲ取テ、以テ之ヲ培養シ、之ヲ長大ニスルノ工夫ヲ爲サザル可カラズ、本篇ニ列叙スル所ノ者ハ、則チ前哲先輩ノ志ヲ立テ、之ヲ保持セシ所ノ事蹟ニシテ、人世事業ノ基礎ヲシテ、牢固ナラシメザル可カラザルヲ證明スルニ足ル者タリ、冀クハ今世ノ人士ガ、志ヲ移動シ易キノ痼疾ヲ療スルノ藥石ト爲リ、後進ノ輩ガ、其志ヲ培養スルノ肥糞ト爲ランコトヲ、

第一 源義家兵法ヲ學ビシ事

源義家ハ、伊豫守頼義ノ長子ナリ。幼名源太。八幡太郎ト稱ス。人ト爲リ勇決英果ニシテ、騎射神ノ如シ。頼義ニ從テ安倍貞任ヲ陸奥ニ擊テ之ヲ誅ス。康平六年、功ヲ以テ從五位下ニ叙シ、出羽守ニ任ズ。嘗テ京師ニ在リ、關白頼通ノ第ヲ過ギ、陸奥ノ戰爭ヲ談ズ。博士大江匡房、別室ニ在リ之ヲ聞テ曰ク、好男子、惜クハ未ダ兵法ヲ知ラズ、從者微カニ其語ヲ聞キ、温テ義家ニ語ル。義家曰ク、其或ハ然ラント、匡房ノ出ルヲ見、其車ニ就テ之ヲ拜ス。遂ニ就テ學ブ。永保三年、陸奥守ニ任ジ、鎮守府將軍ヲ兼ヌ。時ニ藤原家衡、藤原清衡ト、清原真衡ト兵ヲ構フ。義家急ニ任國ニ赴キ、真衡ヲ助ケ、家衡ヲ出羽ニ攻メテ利アラズ。家衡ノ叔父武衡モ亦家衡ニ應ズ。兵ヲ合セテ金澤ノ柵ニ據ル。寛治元年、義家自ラ數萬

騎ヲ率中、之ヲ攻ム。柵ヲ距ツル數里、鴻雁ハ行ヲ亂ルヲ望ミ、見テ曰ク、是レ必ズ伏アルナリト、之ヲ搜ムルバ、果シテ然カリ、衆ニ謂テ曰ク、兵法ニ言フ鳥亂ル、者ハ伏ナリト。我レ學バザレバ、則チ殆シ。弟義光ノ京師ヨリ來ルニ會ス。義家大ニ悦ビ、カヲ戮ハセ、柵ヲ攻メテ之ヲ屠ル。陸奥出羽悉ク平ク、義家父祖ノ業ヲ兼ケ、善ク將士ヲ撫ス。其陸奥ヲ征スル、前後十二年、東國ノ民皆其恩威ニ服シ、稱シテ八幡公ト曰フ。櫻所子曰ク、義家朝臣ノ兵法ヲ江帥ニ問ヒ、雁行ノ亂ル、ヲ見テ伏アルヲ知リタル事實ノ如キハ、國ヨリ人口ニ膾炙スル所ニシテ、喋々論評スルヲ須キズ。然リト雖、臣閉目沈思シテ、當時ノ光景ヲ追憶セバ、義家結髮シテ東征シ、櫛

風沐雨。九年ノ戰鬪ヲ經テ遂ニ凱旋シ。一日菟道ノ關白ノ
前ニ於テ。戰功ヲ説ク。從卒博士ノ言ヲ聞キ。劍ヲ按シテ其
多口ヲ憤ル。亦宜ナリ。然ルニ義家敢テ忿ラザルノミナラ
ズ。其鈐轄ニ遠キヲ知ルヲ以テ。車下ニ磔折ス。夫レ江帥ハ
三朝ノ侍讀トシテ。後三條天皇ノ即位ニ及ビ。荐リニ弊
政ヲ革メ。治ヲ延喜ノ隆時ニ比スルニ至リシモノ。與カツ
テカアリト稱ス。然レバ則チ江帥ノ誨ユル所。當ニ風雲正
奇ヲ極ムルノミナラズシテ。義家ノ材。亦固ヨリ徒ニ父ノ
書ヲ讀ムノ類ニ非ズ。應サニ學ブ所。伏ヲ察ルヨリ大ナル
者アルヤ。疑ヒヲ容レザルナリ。而シテ其雁行ノ亂ル。ヲ
見テ。伏ヲ知リシガ如キハ。固ヨリ偶然ナルノミ。且ツ夫レ
義家十有二年ノ征役ニ從事シ。八州ノ精銳其指麾ニ從フ
地步ヲ占ムルモ。位正四位下ニ過キズ。官鎮守府將軍左衛
門督タルニ過ギズト雖。氏少クモ不滿ノ色無キモノ。豈ニ
耐忍ノ力。他ノ武勲アル人々ニ超過スル者ニ非ズヤ。而シ
テ其基業裔孫ニ及ビ。霸府ヲ鎌倉ニ開クニ至リシ者。亦此
耐忍ノ餘慶ト謂フベシ。功高フシテ官ノ卑キヲモ。敢テ憤
鬱ヲ懷カザルノ氣象ハ。江帥ノ好男子。未ダ兵法ヲ知ラズ
ト云ヒシコトヲ從者ニ聞クモ。敢テ怒ラズ。其出ルヲ見テ車
下ニ磔折スル事ニ於テ之ヲ見ルニ足レリ。嗚呼。英武義家
ノ如クニシテ。耐忍義家ノ如クナル。子孫必ず興ル者アラ
ントノ遺言。果シテ空シカラザリシモノ。亦故アルナリ。今
ヤ開明ノ隆運ニ屬シ。知識ヲ殊邦異域ニ求メラル。然ルモ
猶ホ世ノ人士。事務家ト理論家ト。互ヒニ相嘲ケリ。即チ事

務家ハ理論ハ則チ然リ。然リト雖氏未ダ實際ニ適合セザルナリ。我曹ハ曾テ經驗スル所ナリト云フノ語ヲ以テ論士學者ノ言ヲ遮断スルノ堅塞トシ、理論家ハ、今古中外ノ史典ヲ引テ、事正理ニ契ハサル者ハ、永遠ニ行ハルベキ者ニ非ズ。苟且變漫ハ、事務家ノ習弊ナリト云フノ言ヲ以テ、之ヲ刺衝スルノ鍼砭トス。其見ル所、各一方ニ偏シテ、終ニ水炭相容レザルヲ致ス者ノ如シ。之ヲ義家ノ兵法ヲ江帥ニ問フニ比スレバ、其度量ノ廣狹、日ヲ同フシテ語ルベキニ非ズ。何況ヤ已レガ勲功ニ誇コリ、偶其論ノ恟ハザルアレバ、直チニ官ヲ罷メ去テ、私カニ黨與結合シ、私憤ヲ干戈ニ訴フルモ、前後相踵ギタルガ如キ。其首魁タル者、何ゾ義家ノ爲ス所ヲ追思シテ、愧死スルコトヲ知ラザリシヤ。夫

レ古ヲ尊ビ今ヲ賤ムハ、東洋諸國ノ通弊ノリト雖氏。徒ニ今ヲ尊ムデ古ヲ賤ム、亦其弊無キニ非ズ。試ミニ視ヨ、勇決英果ニシテ、而シテ耐忍勉強ナル、義家ノ如キハ、今世ト雖氏容易ク得ベカラザルナリ。容易ク得ベカラザルノミナラス之ヲ學ブ者ト雖氏亦得易スカラス。徒ニ今ヲ尊ム古ヲ賤ムガ如キ、我ハ服セズ。

第二 越前水將鮮ヲ觀テ蹄泣セラレシ事

天正時代、故阿國ト稱スル者アリ。妙麗ニシテ善ク舞フ。名京畿ニ嘖々々リ、水將秀康ノ伏水ニ在ル。其技ヲ觀ント欲シヨシテ之ヲ客館ニ致ス。阿國頸ニ繫ルニ水晶ノ念珠ヲ以テス。少將其品ノ稱ハザルヲ意ヒ、珊瑚ノ念珠ヲ賜ヒ以テ之ヲ寵ス。既ニシテ阿國進ムデ其技ヲ奏ス、羅衣風ニ從

ト、長袖交横ハリ、其宛轉ノ妙ヲ極ム。少將凝視スル者、久シク因テ大ニ號泣ス。左右怖ムデ、其故ヲ問フ。少將乃チ曰ク、渠裙釵ノ流ト雖、氏既ニ天下第一ノ名ヲ成ス。我ハ則チ堂々タル一丈夫ニシテ、曾テ海内一人ト稱セラル、ヲ得ル、豈能ク羞テ泣カザランヤト、
櫻所子曰ク、大丈夫ノ志ヲ立ル、所謂聖人君子、英雄豪傑ノ言行ヲ聞クヲ以テノミナラス、其耳目ニ感觸スル所、皆以テ其志氣ヲ激勵スルニ足ル。少將ノ豪邁ナル、上杉景勝カ天下ノ勁敵ト稱スルモ、自ラ一人ヲ以テ之ニ當ラントヲ請ヒ、誓テ白川ノ關ヲ越ユル一歩ナラシメズ。然リト雖、臣當時勇武老鍊、其人ニ乏シカラズ。少將未ダ海内一人ノ聲譽ヲ得ル能ハス。是レ一舞妓ヲ觀ル、亦以テ其豪壯ノ氣ヲ

激發スル所以ナリ、古ハ曰ク、君子ハ義ニ喩トリ、小人ハ

利ニ喩トリト、以將ノ如キ、武夫ハ則チ勇ニ喩トリト、語ヲベキナリ。今世俳優講談師等ノ如キ、天下第一ノ名ヲ擲スル者アリ、學術技藝ヲ講究スル人、其技ヲ見、其名ヲ聞、其子且ツ泣テ發憤激勵スルアラハ、必ズ功名ヲ成スノ日アルベシ。宜ク其好ム所ニ就テ、喩トリ所アルベキナリ。何ゾ必ズシモ小人君子武夫ノ利ト義ト勇トニ喩ルアルノミナランヤ、

中江藤樹大學ヲ讀ムテ嘆悟セシ事

中江藤樹、小字ハ與右衛門、其祖ハ加藤侯ノ臣ニシテ、其父ハ農一隱ル。祖ニ先テ没ス。祖乃チ藤樹ヲ拉シテ、伊豫ノ大洲ニ之ク、藤樹童叩ニシテ、老成ノ如シ。年甫メテ十一、一日

大學ヲ讀ミ、天子ヨリ以テ庶人ニ至ル。壹ニ是ハ皆ナ身ヲ
修ムルヲ以テ本ト爲スト云ニ至リ、嘆悟シテ曰ク、幸ニ此
經ノ今ニ存スル聖人豈ニ學ムテ至ル可カラザル者ナラ
ンヤト。年十七京師ノ僧來テ論語ヲ講ス。是時ニ當リ大洲
ノ俗、惟武弁是ニ競ヒ、敢テ從學スル者無シ。獨リ藤樹日夕
往テ聽ク。僧居ルニ僅カニ月餘ニシテ去ル。因テ四書大全
ヲ得テ之ヲ讀ム。而シテ往々僚友ノ爲メニ輿語セラレ。是
ニ於テ晝ハ則テ深ク之ヲ藏メ、夜ニ至ラ始メテ卷ヲ開ク。
藤樹躬行ヲ先ニシ、文詞ヲ後ニシ。每一四民ヲ引テ之ヲ訓
誨ス。人墜愚ト無ク、皆其德ニ服シテ善ニ興起ヒザルハ無
シ。篤學修行ヲ以テ聲名海内ニ施ク。大洲ヲ去テ近江ニ來
リ母ヲ養フニ及ビ、公侯辟召シ、玉帛禮ヲ具シテ之ヲ聘ス

レ正。峻拒シテ應ゼズ。郷黨里閭皆ナ其德ニ薰ジ。商賈ト雖

正得ルヲ見テ義ヲ思ヒ、旅舎茗肆ノ若キ、客遺ル、所ノ物
アレバ、則チ必ズ之ヲ閣上ニ置キ、以テ遺者ノ復々來ルヲ
俟ツ。年ヲ履ルノ後チ、塵土盆滿スルニ至ル。煙管煙包ノ類
ト雖正、竟ニ収用セズ。其此ノ如クナルヲ以テ、鄉閭舉ゲテ
藤樹ヲ尊稱シテ聖人ト爲ス。其聖人豈ニ學ムテ至ル可カ
ラザル者ナランヤノ言、果シテ驗アリ。

某州ノ一士人、藤樹ノ故里ヲ經過シ、其墳塋ヲ弔セント欲
ス。路ヲ農夫ニ問フ。農夫即チ耒耜ヲ舍テ、徑チニ趨テ屋ニ
入り、更メテ潔服ヲ著ケテ出ヅ。士之ニ跟シテ行ク。既ニシ
テ墓前ニ至ル、農夫拜掃甚ダ恭シ。士心ニ之ヲ訝カル。因テ
問テ曰ク、爾チ藤樹ニ於ケル何ノ親故アリテ、敬禮乃チ爾

ルヤト、農夫曰ク、藤樹先生ヲ欽仰スル、豈ニ惟余ノミナラ
シヤ、閩邑皆然カリ、父老毎ニ其子弟ニ語テ曰ク、吾里父子
禮アリ、兄弟恩アリ、室ニ忿疾ハ聲無ク、而ニ和煦ハ色アル
者、職トシテ藤樹先生ノ遺教ニ由ルナリ、此レ一人トシテ
其恩ヲ載カザル無キ所以ナリト、是ニ於テ士容チヲ變ジ
テ曰ク、世稱シテ近江聖人ト爲ス、吾乃チ今ニシテ其虚讚
ニ非ルヲ知ルナリト、即チ其墓ヲ敬拜シ、厚ク農夫ニ謝シ
テ去ル、又藤樹ト同里ノ人、江戸ニ於テ某家ヲ嗣グ、一日客
アリ、語次儒ニ及ブ、客問テ曰ク、中江藤樹ハ子ノ里人ナリ、
聞ク其學世ノ仰グ所トナルト、子必ス其行誼ヲ詳カニセ
ン、請フ吾カ爲ニ語レト、其人容チヲ改メテ曰ク、藤樹先生
ハ吾ガ先子ノ師事スル所ナリ、因テ其平生ヲ悉クセリ、實

ニ近江聖人ノ名ニ非カズ、我レ出デ、此家ノ後タルニ及
ビ、先子其什襲スル所、先生ノ墨蹟一張ヲ將テ我ニ付シ且
ツ戒勅シテ曰ク、此ハ是レ聖人ノ手澤兒善ク之ヲ藏メ知
ラザルモノヲシテ汚サシムルヲ勿レト、今吾子先生ヲ慕
ハバ、則チ之ヲ觀ルヲ得セシメント乃チ起テ禮服ヲ更
メ着ケ一軸ヲ櫃ヨリ出シ捧ゲテ案頭ニ置キ頂禮跪拜ス
ル猶ホ緇徒ノ佛像ヲ崇ムルガゴトシ、客始メテ敬ヲ起シ、
以爲ク、藤樹ハ畎畝ノ一匹夫ナリ、而シテ士大夫ノ間ニ重
ンゼラル、此ノ如クナレバ、則チ其道德世ノ所謂儒者
ト過カニ同ジカラズ、豈ニ禮セザルヲ得ンヤト、鹽叟再
拜シテ後チ之ヲ觀タリシトイフ、
櫻所子曰ク、藤樹ノ篤行力學ヲ以テ、近江聖人ノ名ヲ得、其

墳墓及ビ墨蹟ニ至ルマデ、崇敬セラル、者其初メ大學ヲ
讀ミ、天子ヨリ以テ庶人ニ至ル。壹ニ是レ身ヲ修ムルヲ以
テ本ト爲スノ語ニ至リ、聖人豈ニ學ムデ至ルベカラザル
者ナランヤト感悟シ、志ヲ勵マシテ修鍊セシニ由レリ、思
フニ元和鞅索以來、圭運漸ク旺ニシテ、學問文章、以テ一
世ニ泰斗タル者、其人多シ、而シテ篤行ヲ以テ稱セラル、
者、獨リ翁ト仁齋伊藤氏アルノミ、然ルニ翁ノ門、熊澤蕃山
ノ如キ俊傑ヲ出スヲ以テ視レバ、其決シテ謹直ナル一漢
學老爺ニ非ズシテ、必ズ經世濟民ノ學術アリシヲ知ルベ
シ、唯、其躬行ヲ先トシ、貧賤ニ素シテ、貧賤ヲ行ヒ、敢テ放言
高談、以テ人ノ耳目ヲ駭カスガ如キ、一ヲ爲サバルノミ、吁、
孟子ノ所謂、人ミナ以テ堯舜タルベシトノ語ハ、決シテ言

フベクシテ行フベカラズトセンカ、恐クハ行フベカラザ
ルニ非ズ、行ハザルノミ、然レバ則チ舜タリ跡タル唯、其人
ノ初志如何ニ在リ、且夫レ藤樹ハ、家貧フシテ、論語ノ講ヲ
聽ク月餘ニシテ、後チニ四書大全一部ヲ以テ師トセシモ、
遂ニ其躬行心得彼レガ如キニ至ル、今ノ書生、内地ノ人ハ
從テ學ブニ足ラズトシ、往々碧眼ノ歐客ヲ師トシ、若クハ
英京佛都ニ多年留學シ、一ノ得ル所無キ者ノ如キ、若シ翁
ヲシテ之ヲ見セシメバ、或ハ當リニ驚死スバシ。

第四 長沼宗敬儒術ニ志シ兵學ヲ窮メシ事

長沼宗敬、澹齋ト號ス、信濃松本ノ人、長沼五郎宗政ノ裔ナ
リ、澹齋四歳ニシテ父ヲ喪ヒ、丹波守戸田侯ニ附石ニ從ヒ、
又侯ニ從テ加納ニ移ル、年十五ニシテ仕ヘテ近習トナル、

祿百石、十六歳ニシテ上疏シテ事ヲ言フ。後チ又讜言ヲ進ムルモノ數卒ニ合ハズシテ去リ、江戸ニ赴キ、又筑後ノ國主有馬侯ニ仕ヘ、二百五十石ヲ食ム。寛文八年、祿ヲ辭シテ復々仕ヘス。初ハ澹齋ノ加納ニ在ルヤ、僧寺ニ遊ビ、字ヲ習フ。旁兒ハ小學ヲ讀ムヲ聞キ、輒不能ク之ヲ記ス。僧爲ハニ其文ヲ摘ムテ講解ス。澹齋大ニ悦ビ、是ヨリ志ヲ儒典ニ傾ク。篤々洛闕ノ説ヲ信シ、持敬ヲ以テ主ト爲シ、聖賢ヲ以テ必ズ及ブ可シト爲シ、經術ヲ精研シ、旁ラ甲州ノ兵法ヲ學ブ。既ニシテ曰ク、世傳フル所武田氏ノ兵法ナル者、多クハ小幡景憲輩ガ割裂彌縫スル所ニシテ、當時ノ信傳ニ非ルナリ。吾武門ノ緒トシテ以テ正レバ、ル可カラズト。是ニ於テ古今ハ鎗鎗ヲ鑽極シ、身戎陣ヲ經ル者アルヲ聞ク、必ズ

往々之ヲ質ス、銃馬由藝築城ノ制ニ至ルマデ窮究セザル

ナシ。諸レヲ三代師律ノ意ニ原シ、諸レヲ孫吳七子ニ參シ。下モ明將俞斌ノ法ニ警シ、時宜ヲ置カリ實効ヲ驗シ。網羅參伍シ、明辨精選シテ、兵要錄二十二卷ヲ著ハシ。以テ一家言ヲ建ツ、其大要ハ射取刀槍之ヲ本邦ニ原シ、節制紀律之ヲ漢土ニ取り、大小火器ノ法則ハ西洋ヲ參用ス。嘗テ門生ニ語テ曰ク、吾錄三分ハ書ナリ、二分ハ口訣ニ在リ、五分ハ則チ學者ノ自得ニ在ル。之、後來善ク之ヲ用ユル者アル、必ズ我法ヲ株守ス可カラザルナリト。其最モ深ク悟ル所ノ者ハ、風后ガ握奇武侯ガ八陣ナリ、握奇八陣集解ヲ述ベ、以テ公孫弘獨孤及輩ノ失ヲ糾シ、李靖趙本學等ノ未ダ備ハラザル所ヲ補フ。一時聲譽海内ニ高シ。諸侯爭ヒ請ハテ

師ト爲ス。然レ氏澹齋兵家ヲ以テ自ラ名トスルヲ欲セズ。
又侯門ニ奔馳スルヲ喜バズ。其請ニ應ズルニ三家ヲ以テ
限リト爲ス。先ヅ儒經ヲ説キ。然ル後ナ武ニ及ブ。備前以將
光政其著書ヲ看ルヲ請フ。乃チ出師篇ヲ抽テ呈覽ス。少將
深ク之ヲ嘉ミシ。歎ジテ曰ク。予ガ齒尚ホ壯ナラシムバ。將
サニ斯人ニ從テ遊バントス。今老テ及ブナシト。乃チ其臣
日置伊右衛門ヲシテ從學セシム。明石ノ城主松平若狹守
直明。客禮ヲ以テ之ヲ延キ。班ヲ綱老ニ列シ。政務ヲ與カリ
聞カシム。居ル五年。去テ山城伏見ニ隱ル。元祿三年五十六
ニシテ歿ス。其門ニ學ブ者。後先數百千人。其尤モ著ハル、
者。佐枝尹重。宮川尚古。二人ノ學。分レテ兩派トナル。長沼流
ハ兵學ト稱シテ。久シク世ニ行ハレシ者。即チ澹齋ヲ祖述

ス。其門ハソトイフ

櫻川曰ク。澹齋ノ生ル、澹齋ノ後ニ在ルヲ以テ。人或ハ
其書ヲ敗シ。凡ヒノ空談ト爲スト雖モ。江帥ノ門下ニ義家
アリ。趙本學ノ弟子ニ俞大猷アリ。學ノ以テ已ム可カラザ
ル。此ノ如シ。今ヤ歐洲ト交通セシヨリ。兵家ノ法制一變
スト雖モ。澹齋ノ學。傳テ徳川氏ノ季世ニ及ブマテ。人ニ世
ニ行ハル、者。亦其篤志ヲ學。凡常ナラザルヲ見ルニ足

第五 熊澤了介學ニ志シ良師ヲ求メ大ニ其業ヲ成ス
ニ至リシ事

熊澤了介。名ハ伯繼。小字ハ治郎。後チ助右衛門ト改ム。藩
山ト號ス。父ヲ野尻藤兵衛一利ト曰フ。一利初メ加藤嘉明

ニ仕テ、後チ官ヲ罷メテ京師ニ寓ズ。熊澤氏ヲ娶リ、元和五年ニ以テ了介ヲ平安五條ニ比入、外祖守久養テ嗣ト爲ス。因テ熊澤氏ヲ冒カス。寛永十一年了介歳甫メテ十六、京都所立代故倉候備前候少將光政ニ囑シテ之ヲ擧ク、備候駿春遇ヲ加フ。偶島原ノ賊起ル候幕府ノ命ニ奉ジ、江カヨリ歸リ、兵ヲ治メ以テ應援ニ備ル。是時了介年十八、猶亦年少ナルヲ以テ東郊ニ留ル、乃チ請ハズシテ岡山ニ歸ル。軍律ヲ干カスヲ以テ罪ヲ獲タリ、了介歳二十、自ら以爲テ公事、臨テ下筆シ、草處ニ違テラス、何ゾ以テ文武ヲ講習スルヲ得ニ此ハ若クニシテ身ヲ終フル固ヨリ吾志ニ非ルナリ、今ヤ魯シ將甘ニ俸禄ヲ増賜スルノ命アラントス、然ルカトクンバ則チ如何ゾ命ヲ拒ムヲ得ニヤト、遂ニ近江

桐原之遺一歳餘始テ四書ヲ讀ミ、味註ニ尋テ其義

ヲ研窮ス。又京ニ赴テ良師ヲ求ム、未ダ其人ヲ得ズ、共ニ病ヲ投ズル者一人、語テ曰ク、往日余主ノ爲メニ遠ク行ク時、金二百兩ヲ懐ニス、即チ主ノ齋ヲセシムル所ナリ、途ニシテ驛馬ニ跨ガリ、金ヲ出シテ鞍ニ繫ク、日暮之ヲ收ムルコトヲ忘レテ宿シ、困頓シテ枕ニ就ク、半夜初メテ覺ム、乃チ金ヲ遺ルコトヲ覺トル、則チ茫然トシテ、猶亦疑フテ夢寐ト爲ク、既ニシテ神乃チ定リ、痛心疾首、千思萬慮スレドモ、之ヲ求ムルニ術無ク、一ニ死ヲ維經ニ決ス、慨然トシテ、自ラ天ノ弔恤スル所トナラズシテ、此悲涼ニ逢フヲ歎ズ、持テ鬮ノ聲甚ダ急ナルヲ聞ク、之ヲ問ヘバ、則チ稱ス、馮氏某ナリト、因テ亟カニ出ツ、渠レ即チ金ヲ出シテ曰ク、小子

家ニ歸テ將サニ馬ヲ洗ハントス。鞍ヲ解クニ及ンデ之ヲ
得タリ。是レ君ノ遺ル、所ナリ。故ニ來テ還呈スト。封完キ
「故ノ如シ。吾驚喜措ク所ヲ知ラズ。鞍纏別ニ十六兩アリ。
即ニ解テ以テ之ヲ謝ス。馬夫受ケズシテ曰ク。君ノ物君ニ
付ク。奚ノ謝カ之レアランヤ。然レは夜ヲ冒シテ來ル。此貨
二百文ヲ得レバ足レリト。吾曰ク。尊ヒ自ラ作ス。汝ガ發義
ノ心ナクンバ。吾生ヲ得ルノ地無シ。所謂死ニ生カシテ骨
ニ肉スルナリ。不^レ腴ノ黃物。敢テ報ト云ニハ非ス。斯カ以テ
寸心ヲ表スト。馬夫愈辭ス。乃チ八兩ヲ減ズ。亦受ケズ。稍々
減ジテ纒カニ二方金ニ至ル。馬夫執ルト益確シ。曰ク。君我
ヲ潤ルコトナカレ。予守ル所ハハナリト。吾兼ジテ問テ曰
ク。欲ニ淡キ者。今ノ世多ク見ズ。其義ヲ以テ利ト爲ス。汝ガ

ガ如キニ至テハ。則チ絶テ得ベカラス。所謂守ル所ノ者ト

ハ何ゾヤト。日ク。賤^レ報^レ口ヲ^レ鯛^ス。豈ニ利ヲ思ハザランヤ。而
シテ中江與右衛門、藤樹ト云者アリ。里中ニ教授ス。嘗
テ其言ヲ聞クニ曰ク。誠正以テ其身ヲ修メ。君ニ事フルニ、
忠ヲ致シ。親ニ事フルニ、孝ヲ盡シ。貧ヲ以テ濫ルナカレ。賤
ヲ以テ枉ルナカレ。今若シ賜フ所ヲ以テ之ヲ利トセバ、
則チ此心ヲ欺クナリト。言畢テ去ル。噫。澆季ノ世安ンゾ此
人アルヲ得ニヤト。了介傾聽スルト良久フシテ曰ク。馬夫
ハ一郷ノ鄙人ノミ。素ト道ノ何物タルヲ識ラズ。利ニ趨ル
ト驚ルガ若シ。何ノ義カ之レ思ハンヤ。而シテ其廉潔古ノ君
子ニ愧ザル者。必ズ教育ノ致ス所ナリ。所謂中江與右衛門
氏ナル者。其徳ト學ト想ヒ見ル可キナリ。今ノ世ニ方テ此

人の捨テ誰ニ如適從セシヤト。是日即ち束装シ往テ謁シ業ヲ門ニ受ケントテ請フ。藤樹辭スルニ人ハ師トナルニ足ラザルヲ以テス。了介益請フテ置カズ。二夜其無下ニ寝タリ。藤樹ノ母之ヲ見。藤樹ニ謂テ曰ク。人遠方ヨリ來ル。懇請此ノ如シ。之ニ習フ所ヲ傳フルモ誰カ好ムテ人ノ師ト爲ルト謂ハンヤト。是ニ於テ始メテ接客ス。時ニ寛永十九年。了介年二十四ナリ。明年一利江戸ニ適キ仕ヲ求ム。了介ハ則チ弟妹八人ト留リテ共ニ母ニ事ノ家甚ダ貧シ。毎ニ米ノ糲糠ヲ粥ト爲シテ之ヲ食ラヒ。冬ニ方テハ紙襖ヲ以テ寒ヲ禦ク。刻苦スル。茲ニ三四年。人或ハ之ニ勸ムルニ仕官ヲ以テシ。謂テ曰ク。子ガ家數口アリ。恐クハ將サニ飢ニ及バントス。了介肯ンビス。正保二年。了介年二十七。

學識愈高シ、情前侯素ヨリ其材ノ凡常ナラザラハ知リ、歎

慕シテ止マズ。京師候ノ煩ハシテ旨ヲ諷シ。以テ了介ヲ聘ス。是ニ慕テ了介復岡山ニ來ル。了介ノ岡山ヲ去ル。凡ソ八年ニシテ還ル。居ル丁ニ歳候了介ヲ以テ大隊ニ充テ。三百石ヲ給ス。同僚皆了介ニ矜式ス。後チ擢テ、騎隊帥ト爲シ。藩政ヲ與カリ聞カシム。祿三千石ヲ増賜ス。是ニ於テ了介乃チ侯ニ告ケ。一年食ム所ノ邑八ニ三倍シ。以テ之ヲ貸サレントテ請フ。蓋シ其秩祿ノ當サニ藏スベキ所ノ兵器ヲ具ヘント欲スルナリ。侯之ヲ許ス。後チ幾クモ無ク償還ス。了介侯ニ謂テ曰ク。藩制四疆ノ要害處分。騎隊帥以テ之ヲ保テ。大隊ノ士二十人之ニ屬セシメント。備作播ノ境界大ニ相接ス。侯乃チ了介ヲ以テ之ニ當ツ。了介曰ク。某聞ク治

二處テ亂ヲ忘レス。古ハハ士咸ナ私邑ニ在リ武備焉ヨリ
善キハナシ。然レバ則チ法令遽カニ復シ難シ。某請フ先ツ
之ヲ効シ以テ緩急ニ備ハント。侯之ヲ可トス。是ニ於テ國
士若トヲ簡ビ匹馬單槍以テ諸レヲ便宜ノ地ニ處ク。是歲
了介年三十二。慶安三年。侯ノ述職ニ扈シテ江戸ニ適キ。騎
隊帥ヲ以テ宰臣ノ事ヲ攝行ス。名聲藉甚ニシテ信服スル
者多シ。紀州侯幕府ハ宗室ヲ以テ了介ヲ敬禮スル。送迎必
ズ門ニ及フ。松平伊豆守久世大和守板倉内膳正堀田筑前
守淺野因幡守中川山城守水野周防守木多下野守松平日
向守等ノ諸侯其他名門右族争テ之ヲ延ク。將軍家光公了
介ノ學識ヲルヲ聞キ將サニ召見セントス。尋テ薨去ヒテ
レシヲ以テ果サス。後チ侯ノ江戸ニ述職スルヤ或ハ扈シ

或ハ留マハ兼應三年備前洪水アリ。明曆元年大ニ饑ニ封

内ノ民死スル者九萬人ト云フ。侯大ニ之ヲ憂ヒ乃チ諸老
臣ニ屬シテ謀議セシム。衆論決ヒズ。了介曰ク。緩議日ヲ移
サバ恐クハ賊等塗ニ載スルヲ致サント。是ニ於テ大ニ府
庫ヲ開キ以テ困窮ヲ賑ハス。然レ臣奉行者或ハ遲緩旨ニ
違フヲ以テ了介乃チ自ら巡按シ。德施疆内ニ普ネシ。民困
テ蘇息ス。是ヨリ先キ岡山城東西ノ村落毎ニ盛暑ニ方リ
水ノ涸ルハニ困ム。了介曰ク。是諸山密樹繁陰ノ大氣ヲ蓄
ヒ雲雨ヲ醸ス無キヲ以テノ故ナリト。是ニ於テ田賦ヲ照
料シ。壯丁ヲ調發シ。松數千株ヲ泰山ニ樹ク。培養法ヲ得歲
ヲ速テ繁茂ス。是ヨリ九夏雨多クシテ近村未ダ嘗テ旱魃
ノ患アラズ。又令ヲ下ダシテ川ノ兩邊ノ山木ヲ伐ルヲ禁

不^レ曰ク山^ノ不^レ毛^{ナレバ}則^チ雨^水保^{タス}直^チ上^ノ積^ヲ流^ガ
シ^川隨^テ淺^{シト}凡^ソ封^内池^ヲ穿^テ隄^ヲ築^キ溝^渠ヲ^開キ
漕^運ヲ^使スル^等ハ^事概^テ馬^上之^ヲ望^ミ利^害ヲ^較量^ス
數^十年^ハ後^チ其^言皆^中々^ラザ^ルナ^{シト}云^フ

了介ノ西歸スルニ及ビ往^テ板^倉候ニ謁ス侯曰ク子ハ明
主ニ仕^ヘ言^聽カ^レ計^從ハ^ル吾^徐口ニ之ヲ籌^{カル}ニ子其
終^リヲ善^{セント}欲^{セバ}早^ク致^仕シ^テ田^里ニ屏^處セ
ヨ今ヨリ後^チ復^タ世^事ヲ言^フ勿^レ此^レ功^成リ身^退クノ
義^ヲリ^ト了介拜^謝シ^テ去^ル然^レ氏^眷遇^ノ渥^キ俄^カニ骸
骨^ヲ乞^フヲ得^ス加^{フル}ニ濟^世ハ志^自ラ^已ム能^ハザ^ルヲ
以^テス且^ツ命^ヲ奉^ジテ復^タ江^戸ニ赴^ク是^時既^ニ事^ヲ共
ニスル者ト隙^{アリ}了介亦自^ラ安^ンゼ^ズ明^曆二年^庚辰^年

ニ狩^ス了介躓^{シテ}崖^{ヨリ}墜^テ手足^ヲ傷^ク是^ニ由^テ致^仕
ヲ乞^フ和^氣郡^寺口^ハ其^食邑^{ナル}ヲ以^テ此^ニト居^シ蕃^山
ト踰^ス蓋^シ新^古今^集ニ載^{スル}源^重之^ノ歌^ニ筑^波山^はや
ま^あけ^やま^あぢ^けれ^どな^もい^いな^らば^さむ^らぢ^りま^ま
ト王^陽明^ガ立^志ハ説^此歌^ハ意^ニ符^ス而^{シテ}志^ヲ告^ゲやま^ま
蕃^山ナ^リ故^ニ以^テ歸^ト爲^{スト}云^フ

了介既^ニ嘉^遜ノ志^{アリ}侯^微カ^ニ其^情ヲ知^{ルト}雖^レ然^カ
モ強^テ止^ムベ^カラ^ズ又^意之^ヲ留^{メント}欲^ス是^ニ敬^テ公
子^政興^ヲシ^テ其^祿ヲ襲^{ハシ}メ後^ト爲^ス者^ノ如^シ是^歲萬
治^元年^了介^年四^十遂^ニ疾^ヒヲ以^テ骸^骨ヲ乞^ヒ去^テ京^師
ニ寓^ス而^{シテ}一^條右^府中^院大^納言^清水^谷大^納言^油小^路
大^納言^中御^門中^納言^野々^宮黃^門押^小路^參議^伏原^參議^等

其他貴紳其學ヲ慕ヒ、束脩ヲ行テ來學シ、佩玉、鐙、車馬門
 二滿ツ、聲華一世ヲ蓋フ、居ルノ之ニ頃クス、或人了介ヲ所
 司代牧野候ニ請ス、牧野候之ヲ信ジ、了介ヲ忌ム、寛文七年
 ノ春、遂ニ行テ大和ノ芳野ニ隱ル、然而メ又去テ、廬ヲ山城
 ノ鹿背山ニ結ブ、客アリ問フテ曰ク、先生頃者間アリヤ否
 ヤト、曰ク吾善ヲ為ス、惟レ日足ラズ、何ノ閑暇カ、之レアラ
 ント、客曰ク今日善ヲ為スモ其跡何ニ由テカ見ハレンヤ
 ト、了介毅然トシテ曰ク、人苟モ志ヲ義ニ立ツレバ、則チ鹽
 嗽、擗、繼モ皆善ニ進ムノ地タリ、若シ然ラズンバ、一タビ九
 合ヲ匡スモ、亦復兒戲土羹ノシト、客曰ク善哉ト、他日又問
 フ、先生何ノ樂ム所ゾト、了介曰ク、獨リ樂地ノ名教ニ在ル
 ノ、此ハ了介ノ自傳也、 羅月松風モ亦自ラ天心ヲ見ルト、寛文九年、酒

井井樂頭板倉内膳正二侯首ノ稱へ了介ヲシテ、勘洲明石

ニ徙ラシム、時ニ松平日向守明石ニ守タリ、因テ太山寺ノ
 傍ニ居ラシム、策子、益進ム、門人嘗テ問フテ曰ク、夫子未ダ
 嘗テ憂レザルカ、何為レゾ窮ニ處スル申々如ナルヤ、夫子
 未ダ嘗テ懼レザルカ、何為レゾ厄ニ遭フテ裕々如ナルヤ
 ト、了介曰ク、是レアルカ、警使仁者ニシテ必ス達セハ、 閱
 損化ヲ波ヒニ辭セズ、勇者ニシテ必ス遂ゲバ、伸由、纒、臺
 下ニ結バズ、了介時ニ東スレバ、子、衆ノ賦ヲ、聖ム、時、吾、レ
 自身ヲ一畝ノ宮ニ東カ、又否、泰ハ運ナリ禍福ハ天カ、天
 レ、又何ヲ加憂ハ何ヲ加懼レシ、吾ハ則チ以テ之カ、大、
 靈ト謂フ、古人罪無クシテ、月ヲ謫居ニ奉テ、職、
 適月ニ乘ジテ、中庭ニ彷彿ス、幽情遠概亦人、芥、 似テ、富、

子。籍。テ。世。ニ。重。ク。ス。ル。ハ。心。誠。ニ。罪。アル。ヲ。知。ル。堂。ニ。天。ニ。祀。
 子。サ。ラ。ン。ヤ。吾。内。ニ。省。ミ。テ。疚。シ。カ。ラ。ズ。人。言。何。ソ。恤。フル。ニ。
 足。ラ。ン。ヤ。余。誤。テ。嫌。諱。ニ。觸。ル。ト。雖。氏。世。人。マ。タ。罪。名。ヲ。定。
 メ。タ。ル。ニ。非。ル。ナ。リ。百。年。ノ。後。子。必。ス。公。論。ヲ。ラ。ン。唯。是。間。居。
 無。事。悠。歌。講。誦。竊。カ。ニ。先。王。ノ。道。ヲ。樂。ム。テ。老。ノ。將。サ。ニ。全。ラ。
 郡。山。ニ。移。ス。了。介。亦。此。ニ。遷。ル。幾。ク。モ。無。ク。復。封。ヲ。占。河。ニ。教。
 ス。本。多。下。野。守。之。ニ。代。ル。了。介。ヲ。待。ツ。一。ニ。松。半。日。向。守。ノ。時。
 ニ。准。ズ。年。子。遠。方。ヨ。リ。至。テ。業。ヲ。受。ク。ル。者。多。シ。其。名。海。内。ニ。
 噴。々。タ。リ。貞。享。四。年。將。軍。綱。吉。公。ノ。命。ヲ。以。テ。了。介。又。占。河。ニ。
 徙。ル。松。半。日。向。守。之。ヲ。待。ツ。愈。厚。シ。其。歲。ノ。一。月。封。事。ヲ。幕。府。
 ニ。上。ツ。リ。政。務。ヲ。更。始。ス。ル。ヲ。勸。ム。大。ニ。旨。ニ。忤。ヒ。古。河。ニ。禁。

綱セラル了介斯ニ時ニ用テラルヲ得人唱然トシテ歎

ジテ曰ク吾道行ハレズ何ヲ以テカ自ラ後世ニ見ハレシ
 ヤト乃チ大ニ志ヲ著述ニ専ラニス其學經濟ニ長ズ論ハ
 其皆獨得ノ見ナリ

了介資性温良寛弘ニシテ家人奴婢ト雖氏相親ハ猶ホ骨
 肉ハゴトシ菜羹鮭炙ト雖氏來テ飲食スル者各飽ヲ獲テ
 去ル家法曩モ儉素ニシテ妻子使務ヲ幹從ス闕幡猜惟ハ
 爾ニ外ハ發ハレズ衣服飲食泊然トシテ嘗ム丁ナシ脱
 最モ音樂ヲ好ミ音律ヲ精數シ推樂解ヲ著シ之ヲ弟子ニ
 授ク世知ル者或ハ希ナリ元祿四年ノ秋了介年七十三ニ
 シテ歿ス其墓ニ展スル者余ニ至テ絶ヘズト云フ
 了介年少ノ時體貌充肥セリ自ラ以爲ク武人ノ職一旦緩

急甲ヲ被ハル兵ヲ持シ馳驅奔走シテ爲サバル并照シテ
シテ豊肥斯ハ如ク甚ク之ヲ觀ンズ。稟受ニ由ルト雖も亦
或ハ安佚ヲ致ス所ナリト。是ヨリ昔ヲ攻メ淡ヲ食ヒ日夜
武事是レ講ズ。或ハ曠野ニ出テ、鳥銃ヲ發シ。或ハ山村ニ
行テ民衆ニ投ズ。其當直ニ當ルヤ。水兵ヲ裨弼ニ藏クシ。僚
友腹ニ流クノ後チ。獨リ竊カニ空庭ニ出テ槍劍ノ法ヲ演
ス。或ハ深夜屋ニ登リ火ヲ禦ガヲ習フ。是ノ如クスル者十
餘年。身軀消瘦削ヒリト。
櫻所子曰ク。惺窩以來。儒術ヲ以テ身ヲ立テ家ヲ興ス者多
ホカラストセズ。而シテ上太夫ノ品行ヲ維持シ。三百年ノ
久キニ及べル者。儒教ノ功多キニ居ルト云フモ。亦不可ト
キナリ。而シテ其間。儒士ニシテ自ラ一地方ノ政治ヲ與カ
リ聞キ。德澤ヲ其民ニ及ホセル者ハ。獨リ熊澤菴山アルヲ
ミ。菴山ノ始メ學ニ志スヤ。朱註ニ依テ四書ヲ研鑽シ。其師
ヲ求メテ得ズ。偶京都ノ逆旅ニ於テ。中江藤樹ノ學識德行
凡常ナラリルヲ聞キ。奮テ之ガ許ニ至ルヤ。燕下ニ臥ス丁
ニ夜。其篤志想フ可キナリ。而シテ業成テ後チ。富榮ニ處テ
驕ラス。窮阨ニ居テ戚マズ。其胸襟ノ洒々落落タルヲ視ル
ニ足レリ。今世ノ人士。動モスレバ地位ニ隨テ其志嚮ヲ易
シ。朝夕ニ君權ヲ主張シ。夕べニ民權ヲ唱和スル如キ者ト。
固ヨリ日ヨ同フシテ談ズベキニ非ズ。且夫レ今ノ學者論
士間。風俗ノ文弱ニ流ガル。ヲ慮カリ。且ツ身体ヲ勞動ス
ルハ。攝生ノ要訣ナルヲ以テ。或ハ擊劍ヲ學ブベシトイヒ。
體操ヲ忽セニスベカラズトシ。經濟家ハ歐洲學士ノ言ニ

由テ池ヲ穿テ隄ヲ築キ溝渠ヲ疏鑿シ、遭運ヲ便ニスルノ
利ヲ説キ、或ハ森林ノ國ニ必用ナルヲ論ス、而シテ明政府
ノ措置セラル、所モ亦森林ヲ蕃殖シ、漕運ヲ快利ニスル
等ノ事ニ深ク注目セラル、者ノ如シ、蕃山二百年ノ昔日
ニ在テ、既ニ皆ナ之ヲ試ム、豈卓識ト謂ハザル可ケンヤ、獨
リ此ノミナラス、蕃山ハ一介ノ士ニシテ、既ニ備候ノ殊遇
ヲ受ケ、縉紳侯伯束脩ヲ行ヒ道ヲ問フアリ、或ハ賓師ノ禮
ヲ以テ之ヲ遇スルアリ、名門右族争テ之ヲ延クニ至ル、紀
州候頼宣ノ蕃山ヲ禮待スル、送迎必ス門ニ及ブト云フ、其
他貴顯ノ敬重スル所トナリシハ推シテ知ルベキナリ、現
今泰西ノ學ヲ唱ヒ、世人ガ泰斗視スルノ學士アリト雖、
未ニ其徳望此ノ如クザル人アルヲ聞カズ、思フニ蕃山ノ文

化未々遍ネカラザルノ昔時ニ在テ、能ク斯クノ如キヲ發
セル者、命世ノオアルニ由ルト雖、抑モ亦其志ヲ持
堅忍ニシテ、勉強刻苦、實學ヲ磨礪シ、智識徳望並ヒ高キヲ
以テニ非スヤ、夫レ蕃山嘗テ道ヲ求ムルニ熱心ナル、海下
ニ卧スヲモ厭ハサルノ心ヲ以テ心トシテ終始變ゼズ、故
ニ其志ヲ得レハ、一藩ノ制度ヲ釐革シ、天下ノ人士ヨシテ、
目ヲ驚ヒシムルノ功業ヲ建テ、其志ヲ失ハバ、子弟ヲ教授
シテ、心ヲ風月ニ娛マシメ、幽囚セラレ、ニ至テ生キテ其
道ヲ行フニ由シ無キヲ知リ、専ラ著述ヲ事トシ、後世ヲ裨
益セントス、嗚呼蕃山ノ如キハ、有爲ノ士ト謂フベキナリ、
故ニ其出身ノ始メヨリ、歿後墓ニ展拜スル者、今ニ至テ繼
サルニ至ルマデ、一モ頑ヲ醒マシ懦ヲ起ス事ニ非ルハ無

ク昔ト以テ傳フベシト爲ス故ニ煩ヲ憚ラスシテ前ニ具
載ス冀クハ蕃山ノ風ヲ聞テ志ヲ立テ節ヲ勵マス人アラ
シトヲ

第六 岡崎秀民志ヲ隣家ノ弦聲ニ激勵セシ事

岡崎秀民ハ備前ノ藩士ニシテ慶安時代ノ人ナリ。際ヲ以
テ同族ニ任フ其隣家ニ住スル青地三之丞トヘル士ハ
頗ル射術ニ勤精シ公務ノ餘暇ニハ夙夜射籠ヲ射テ習練
スルヲ常トシ晴雨ヲ問ハズ寒暑ヲ論セス遂ニ其技大ニ
進ミ善ク狂猪ノ眼ヲ射ル或時藩侯ノ前ニ放テ五矢ヲ以
テ梅花ヲ的トシテ試シニ一矢ノ其葦ニ命中セザル無キ
ニ至ル此一放テ候深ク其技能ヲ感賞シ猶ホ一矢ヲ以テ

中央ノ村ハ約ヲ射セシト云々

スレバ後矢ハ前矢ノ括ヲ射テ鏃ニ及ベリト秀民日夜
ヲ陽ハ隣家ノ弦聲ヲ聞キ以爲ク三之丞ハ寒暑風雨ヲ
論ヒ且日夜刻苦スル此ノ如シ思フニ我が業ノ如キ夏膏
ハ蚊蠅ノ刺ニ在テ學バ可ク冬日ハ足ヲ火閣ニ投ジテ讀
ムハ武人亦弓馬ヲ習練スルニ比スレバ其難易莫カニ
殊ナリ然ルニ彼ハ其困難ナル弓術ヲ習修シ夜ヲ以テ
日ニ繼グ我ハ容易ニ爲シ得ベキ學業ヲステ惜リテ光
陰ヲ徒消スルハ豈ニ深ク省察セザルベケンヤト爾後志
ヲ立テ朝々ニハ仲景ノ書ヲ繕キ夕々ニハ扁華ノ典義ヲ
探リ弦聲ハ讀書ハ聲ニ和ス終ニ共ニ一層ノ精力ヲ勵マ
シ相競テ倦ムトヲ知ラザルニ至リ秀民亦國手ノ名ヲ轟
カセリ故ニ當時備前ニ於テ技藝ニ鍊達セハ者ヲ稱スル

日本書紀 卷之...

必ズ先ヅ指ヲ青池ノ弓術岡崎ノ醫學ニ屈セリト。

櫻所子曰ク、人激スル所ナケレバ、發奮勵精スルノ好機ヲ

得ザルモ、ナリ。秀氏亦ニ之丞ト隣ヲ爲スニ非ンバ、恐ク

ハ唐轍ヲ以テ其身ヲ終ヘン。隣ヲ擇ブ豈童ニ子ヲ教ユル

ノ、ソレニシヤ。然リト雖、氏爲スアルノ士ハ、尋常庸人ノ敢

テ意ヲ怒ザル所ニ於テモ、猶ホ其志ヲ激勵スル者ナリ。即

チ越前貴門ガ、阿國ノ舞ヲ觀テ泣クノ類ナリ。秀氏ガ隣家

ノ弦聲ニ激セラレテ、其業ニ進ミシカ如キ、亦理ノル哉。

第七 谷松三介勤苦志ヲ求メシ事

谷松三介、一齋ト號ス。上佐ノ人、其父時中、天性豪爽ニシテ

志即ハリ、最ニ儒學ヲ喜ブ。時喪亂、餓シ、文化未ダ開ケズ、

況ヤ僻僻最ニ典籍ニ乏シ。書ヲ四方ニ求メ、之ヲ精メ、

家室之ガ爲メニ殆ンド蕩盡ス。嘗テ三介ヲシテ、小倉三省

ノ所ニ學バシム。謂テ曰ク、吾聞ク富貴ハ志ヲ失フト。田産

五百石、此レ子孫ヲ惠ム所以ニ非ルナリト。乃チ之ヲ鬻ギ、

僅カニ數頃ノ以テ、ロヲ劔スベキヲ存スト云フ。三介上佐

ヲ去リ、京師ニ移リ、而シテ江戸ニ遊ビ、楮葉候ニ事フ。暮年

之ヲ辭ス。性淡泊ニシテ、財貨ヲ屑トセズ。且ツ其悟性中人

ニ逾エズト雖、氏然カモ勤苦志ヲ求ム。是ヲ以テ其學體用

アリト稱ス。

櫻所子曰ク、徂徠ハ當時名ヲ一世ニ擅ニシ、文壇ニ於テ許

ス所鮮シ。而シテ其藪園隨筆ニ、谷一齋先生ナル者アリ云

云ト謂フヲ以テスレハ、以テ一齋ノ評ヲ定ムルニ足レリ。

而シテ其人、悟性中人ニ逾エズ、勤苦志ヲ求メ、以テ之ヲ得

タリトセバ世ノ學業ヲ成サントスル人其才無キヲ憂フ
ルヲ勿レ其學資ニ乏シキヲ歎スルヲ勿レ唯辛苦ヲ登肯
スルヲ歎ハザルノ志未ダ立タザルヲ憂ヘヨ

新井君美貧ニシテ志氣ヲ撓屈セザリシ事

新井君美白石ト號ス江戸ニ生ル其父ハ常陸ノ人ナリ年
少フシテ江戸ニ到リ久留利侯ニ仕フ白石初メ父ニ從テ
久留利一官人年二十一ニシテ父ト共ニ仕ヲ辭ス是ニ於
テ貧甚シ人或ハ之ニ勸ムルニ鑿ヲ業トシ若クハ字ヲ教
ヘ以テ給ヲ取ルノ計ヲ以テス白石從ハズ一ニ意ヲ儒經
ト史冊ニ刻ス時ニ河村瑞軒殷富ニシテ多ク書ヲ藏ス乃
チ就テ借覽ス瑞軒心白石ノ凡ソラザルヲ知リ因テ其友

田侯ニ遊事人居ル十年志ヲ得ズシテ去ル時貧亦甚

シ。饑セズト意氣少クモ撓マズ白石少フシテ大志アリ常ニ
自ラ論シテ曰ク大丈夫生テ封侯ヲ得ズンバ死シテ當サ
一關羅王ト爲ルバシト遂ニ幕府ニ仕ハ正徳辛卯韓使來
聘セシ時使者ト禮法ヲ論ジ竟ニ使者ヲシテ屈伏セシメ
シ等殊功多シ從五位下ニ叙シ筑後守ニ任ス年六十九ニ
シテ卒ス古今著書ノ富白石ニ若クハナシ未ダ稿ヲ脱セ
ザル者ヲ併セテ凡ソ一百六十餘種ニ及ベリト云
櫻所子曰ク我邦兵戈紛擾ノ日ヲ除クノ外ハ閱閲ヲ以テ
官職ヲ世襲スルノ習俗タリシヲ以テ才能アリト雖モ仕
進ノ路ヲ得ル太ダ難シ白石右文ノ世ニ生レ寒門ニ長ジ

所ナリ宜ナル哉其業ヲ成スニ及ビ名聲ヲ朝野ニ施クニ
至リシヲ世ノ花費ノ為ニ八十金ヲモ愛マズ書ヲ買ヒ師
ニ謝スルニハ一金ヲモ吝ム輩ハ猶小資本金ヲ募ラズシ
テ一大會社ヲ起サントスルガ如シ生涯碌々トシテ人後
ニ立ザルヲ欲スト雖氏豈得ベケニヤ

第十 物徂徠遠志ヲ抱キ一代ノ儒宗タリシ事

徂徠又讓園ト號ス姓ハ莪生氏小字ハ惣右エ門江戸ノ人
其父方菴鑿ヲ以テ幕府ニ仕フ延寶中事ニ坐シテ上總ニ
流竄セラレ徂徠父ニ從テ共ニ往ク居ル丁十三年其親ハ
所ハ田父野老其處ル所ハ蟹戸離煙既ニ書籍ニ乏シク又
師友無シ篋中僅カニ大學講解一本アルハ徂徠此ニ因
テ研究ス其警敏振興ト云ハルハ徂徠此ニ因

赦ニ值フテ江戸ニ還ルコト業殆ンド大成ス初メ芝街ニ
ト居ス時ニ貧居洗フガ如シ舌耕殆ント衣食ニ給セズ増
上寺ノ前ニ藜祁ヲ賣ル家アリ徂徠ガ貧ニシテ志アルヲ
隣ハシ日ニ雪花菜ヲ賣ル後チ祿ヲ食ムニ至リ月一米三
斗ヲ贈リ以テ之ヲ報ズ徂徠柳澤氏ノ侯ニ封ゼラルニ
及ビ召サレテ書記ト爲ル然レ氏祿尚ホ微ナリ尋テ柳澤
侯累リニ封ヲ益ス徂徠亦侯ノ寵遇ヲ以テ累リニ其秩ヲ
益シ五百石ニ至ル徂徠ノ儒學ハ然トシテ一家ノ見ヲ
立テ先儒ノ作ス所ハ一切之ヲ排ス其豪邁卓識雄文宏詞
一世ヲ籠絡ス終ニ海内仰テ此邦未曾有ノ人ト爲スニ至
リ又少時兵學ヲ精修シ其仕途ニ就ク亦兵學ヲ以テシ
儒ヲ以テセス或時大岡越前守忠相曰久聞ク徂來博識洽

聞知ラザル所無シト。余將サニ試トニ問テ以テ躡カシメ
 ントスト。乃チ招イデ問テ曰ク。世ニ蠶婚ノ説アリ。何ノ謂
 ザヤ。祖徠答テ曰ク。事某年某人ノ著スル所ノ一小説ニ出
 ルナリ。乃チ其書載スル所。鼠類ノ眷屬名姓。口ヲ衝テ縷々
 注グガ如シ。忠相始メテ其疆記ニ服ス。其疆記亦斯類ナリ。
 祖徠書ヲ看テ暮ニ向ヘバ。則チ出テ。擔隙ニ就キ。擔隙亦
 字ヲ辨ズ。可カラザルニ至レバ。則チ入テ齋中ノ燈火ニ對
 ス。故ニ且ヨリ深夜ニ及ブマデ手卷ヲ釋クノ時無シ。其平
 素分寸ノ光陰ヲ惜ム率ネ此類ナリ。眼南郭某歲ノ元日祖
 徠ヲ訪フ。祖徠方ニ几ニ隱ツテ。孫子ヲ閱ス。面垢洗ハズ。髮
 亂レテ梳ラズ。新年ヲ知ラザル者ハ若シ。乃チ麴々トシテ
 兵ヲ談ジテ置カズ。南郭竟ニ新禧ヲ祝スルヲ得ス。シテ去

櫻所子曰ク。徳川氏ノ霸府ヲ江戸ニ開キシヨリ。昇平三百
 年。其間鴻匠碩儒多シト雖也。其道德ニ於テハ。則チ藤樹仁
 齋。其博學冷聞ニ於テハ。則チ祖徠物氏ヲ推ス。後チノ學者。
 激昂奮勵スレ也。竟ニ及ブ能ハズ。祖徠ノ學。其瑜瑕得失ハ。
 則チ猶ホ免ヌガレズト雖也。亦不世出ノ豪傑ト謂ハザル
 可ケンヤ。然ルニ藤樹仁齋。祖徠ノ三大家。共ニ師友無クシ
 テ。書籍ニ乏シク。加フルニ其家貧窶ナルヲ以テスルモ。屹
 然不撓ノ志ヲ懷キ。分寸ノ光陰ヲ惜ミ。耐忍勉強ヲモツテ。
 遂ニ旗幟ヲ文種ニ樹テ。一世ノ泰斗タルノミナラズ。後世
 ハ學者ヲ風靡スルニ至ル。中ニ就テ祖來ノ如キハ。其書ニ
 乏キ。大學諺解一本ニ止ル。其家ノ貧キ。雪花菜ヲ食テ飢ヲ

支フルニ及ビシニ非ズヤ。今ノ青年輩、動モスレバ學資ニ
乏キヲ許ヘ、書籍ヲ闕クヲ歎ジ、良師無キヲ慨スル者。至竟
已レガ怠惰ニシテ、安佚ヲ貪ボルノ非ヲ掩フノ口實ノミ
若シ然ラズト謂ハ、前ノ三大家ガ、學業ヲ大成セシ傳紀
ヲ視ヨ。

第十一 雨森芳洲年八十一始メテ和歌ヲ學ヒシ事

雨森芳洲、字ハ伯陽、小字ハ東五郎、京都ノ人ナリ、年十七、八
江ノ遊ビ、木下順菴ニ從學シ、業大ニ進ム。順菴稱シテ後
進ノ領袖ト爲ス、遂ニ其薦メニ因テ、對馬侯ニ並仕シ、文教
ヲ掌ドリ、韓人ニ接待シ、名聲海ノ内外ニ馳ス。芳洲ノ韓語
ニ通ズルヲ以テ、韓人ト相説話スル、譯者ヲ假ラス、韓人戲
レテ曰ク、君善ク諸邦ノ音ヲ操ス、而シテ殊ニ日本ニ熟ス

ト、芳洲年八一、始メテ倭歌ヲ學ブ、其意ニ謂ラク、
詩ハ則チ時アリ、之ヲ作ル、稱ス可キ者無シト雖、氏平仄ヲ
謬ラザルヲ得、國風ニ至テハ、一ニ其法ヲ解セズ、先ヅ古歌
ヲ熟讀スルニ如クハナシ、今ヨリ古今集ヲ讀ム者、一千遍
而シテ後、自テ賦スル者、一萬首、其レ或ハ少ク通スル所ア
ラント、乃チ二年ニシテ千遍畢ル、又三年ニシテ萬首就ル、
梁川蛸巖曰ク、伯陽子ニ語テ曰ク、玉露凋傷、楓樹林、美ハ則
チ美ナリ、我ガ猿太夫ノ紅葉鹿嶋、人ヲシテ感ジ易カラシ
ムルノ愈ルト爲スニ如カザルナリト、伯陽華音ニ善シ、綜
博ニシテ、藤村アリ、其品茂郷ノ下ニ出テズシテ、其言此ノ
如シ、知言ト謂フ可キ者ナル哉ト。

櫻所子曰ク、我邦ノ三十一言周代ノ三百篇、其他佛經ノ偈

頌、舊約全書ノ詩篇、及び回教火教ノ神ヲ禮拜スル唱歌等。
 世界各邦、皆古來此種ノ者アリ。而シテ其人ヲ感動スルハ
 必ズ其國人ノ耳目ニ慣熟セル者ヲ以テ最モ深シトス。且
 ツ昔時戦亂ノ日ト雖、將士ノ心ヲ國風ニ傾クル者多シ。
 中ニ就テ義家ノ功、來關ノ咏、及び貞任ノ年を經、絲の素
 ぬの悲、小、さ、に、トノ句ヲ以テ、義家ノ衣の、は、て、は、な、ら、び
 に、け、り、ト云ヒカケシニ應ジタルガ如キ。宗任ノ梅花ヲ問
 ハレテ直チニ國風ヲ以テ答ヘシカ如キノ類、枚舉ニ遑ア
 ラズ。太田持資ガ、遠くあり、近くある、みの、濱、千鳥、鳴、音、に
 潮の満、干と、む、ら、ト云フニ由テ、潮汐ヲ知り、底ひかき、淵
 や、ハ、蹠、い、山川の、残、き、瀬、木、と、そ、あ、だ、波、は、た、く、ト云フニ由
 テ、利根川ヲ渡リ、板倉周防守、念、鳥、の、尾、の、中、は、其、奥、の、人、を、

す、い、佛、法、僧、の、鳴、に、つ、ま、い、ト云フニ由テ、山賊ヲ捕ヘシ
 ガ如キ。國風ニ由テ、或ハ用ヲ軍陣ニ爲シ、或ハ賊ヲ拿捕ス
 ルノ助ケトナル。是所謂下龜手ノ藥モ、之ヲ大用スレハ封
 侯ヲ得タルガ如ク、一時ノ吟詠ニ出シ者モ、亦用ヲ爲ス
 アリ。世ノ洋學者流、動モスレバ和歌ヲ以テ、昔時公家ノ玩
 弄物ノ如ク言做スハ、太ダ謬レリト謂フベシ。且ツ夫レ洋
 ノ東西ニ論無ク、其言異ナレ雖、性情ノ感ヲ述ブルハ則
 チ同ジ。聞ク昔シ唐ノ僧皎然トイヘル者アリ、韋蘇列ノ詩
 風ヲ擬シ、其悦ビヲ得ント欲シ、數首ヲ示ス、韋蘇列賞セズ。
 因テ舊作ヲ示ス、韋蘇列大ニ賞歎シテ、凡ソ詩ハ各自ノ得
 所アリ、強チ人ヲ學ビ、其心ヲ悦バシメントスレバ、本色ヲ
 失テ精巧ナラズト誡メシト云。况ヤ日本人ニシテ唐宋ノ

詩ヲ學ブハ徒一技ヲ學ビ擧ニ倣フモノ、こナルヲヤ、何
ゾ心情ヲ盡シテ遺憾無キヲ得ンヤ、既ニ自ラ其心情ヲ盡
ス充分ナラザル、何ゾ能ク人ヲ感動スルニ足ランヤ、芳洲
茲ニ見ルアリ、尋常腐儒ノ僻見ヲ打破ス、卓識ト謂フベキ
ナリ、而シテ齡既ニ八旬ヲ過ギ、古今集ヲ讀ム千遍、自ラ賦
スル萬首、五年ニシテ其功ヲ畢ハル、篤志ト謂フベキナリ、
世、齡未ダ知命ニ至ラズ、而シテ近體ノ詩數百首ヲ作ル
ニ過ギズ、解ス可カラザルノ句ヲ綴リ、騷人翰士ヲ以テ自
負スルノ徒、反省スル所ヲ知レ、

第十二 太宰純管麟嶼ヲ規セシ文、

太宰純、小字ハ彌右衛門、春臺ト號ス、信濃ノ人ナリ、徂徠ノ
門ニ於テ、各聲一時ニ冠絶ス、其人トナリ、嚴毅方正ニシテ、

權貴ニ對スルモ、言忌憚無シ、管麟嶼ト云フ者アリ、才氣
發、年十三ニシテ、擢テラレテ幕府ノ儒官ニ列ス、一時稱
テ奇童子ト爲ス、然ルニ卒ニ苗ニシテ秀デズ、春臺之ヲ規
破シテ少クモ惜サズ、其忠誠激切ナル、亦以テ幼ニシテ
氣アルモノ、規箴トスルニ足ルヲ以テ、其書ヲ譯シテ左
ニ撮録ス、

純、足下ノ學ニ於ケルヲ觀ルニ、王公大人ノ學ヲ以テ戲
ト爲シ、以テ日ヲ消スル者ノ如クナルヲ無キヲ得ンヤ、
夫レ足下ハ布衣ニ非ズト雖、然カレ氏儒生ナリ、不幸
ニシテ早く神童ヲ以テ聞ユ、幸ニ國恩ヲ蒙リ、稟養ヲ賜
ハリ、文學ニ列シ、朝請ヲ奉ズ、以シト雖、氏以テ務ハル所
ヲ知ラザル可カラズ、古人童穉ニシテ、日ニ六藝古文、數

豈其業ノ大成ヲ望ムベケンヤ。太宰春臺ガ管嶼ニ忠告
スル所ノ如キハ、世ノ才氣アル少年ガ頂門ノ鍼砭ニシテ、
亦其苦學ノ志ヲ培養スルノ肥料ニ供スベキナリ。

第十三 吉益東洞貧窶ニシテ毫モ志ヲ折カザリシ事

吉益東洞本姓ハ畠山氏安藝ノ人ナリ。東洞少フシテ志氣
アリ。以為ク我が遠祖政長ハ管領タリ。我天下ノ名族トシ
テ。豈再ビ家ヲ興サ、ル可ケンヤト。恆ニ兵法ヲ學ビ。馬ヲ
馳セ。劍ヲ試ム。年已ニ長ブルニ及ビ。自ラ以為ク。太平ノ世
武術ニ長セジトイフ。亦其技倆ヲ試ムル日無シト。是ニ
於テ。慨然トシテ誓テ曰ク。大丈夫良相トナフズンバ。當
ニ良醫トナルベシト。遂ニ醫術ニ心ヲ潜メ。龍勉ム。ル。丁歲
アリ。且夜怠ラス業成テ後。舟邊僻ノ地ヲ居ル。疾ヲ救フ

功多カラズ。業ヲ授クル弘カラズ。京都ニ移住セシニ。若カ
バト。元文三年。家ヲ携ヘテ京路ニ移リ。專ラ仲景ノ治方ヲ
唱フ。東洞京都ニ在リテ。其業未ダ盛リニ行ハレズ。門生進
ム。丁無シ。偶、偷兒ノ贖ヲ掠メ去ルニ遭ヒ。家更ニ貧シ。其友
村尾某仕途ニ就カンコトヲ勸ム。東洞可カズシテ曰ク。初
メ我レ子ヲモツテ知已ナリトス。今ニシテ後子子ハ我レ
ヲ知ルモノニ非ルヲ知ル。我レ貧ニシテ且ツ老親アリト
雖。氏何ゾ志ヲ降シテ。祿ノ為メ一仕フルモノナラニヤ。貧
ハ士ノ常ニシテ。窮通ハ命ナリ。假令我術行ハレズト。離氏
天豈ニ斯道ヲ喪ボ。サニヤト。而シテ家益貧ク。饑餓マサニ
且タニ迫ル。東洞晏然トシテ憂戚セズ。一日其舊識ナル賈
翁アリ。東洞が貧ヲ憐ミ。金若干ヲ與フ。東洞毅然トシテ曰

ク我レ故無クシテ金ヲ受クベキニ非ズ。又之ヲ受クルモ報ユルノ日無シ。賈翁之ヲ強テ曰ク。吾何ゾ償ヒヨ求ムル者ナランヤ。且ツ先生ヲシテ凍餓ニ陥ラザラシメントスル者ハ。世人ノ生命ヲ救濟センガ爲メナリト。東洞其言ニ感ジテ之ヲ納レ。漸飢寒ヲ支フルコトヲ得タリ。幾クモ無クシテ一人ノ病者ヲ診シ。藥劑ヲ投ゼシニ。山腋東洋其幣ニ在リ。大ニ其主方ノ的當ナルヲ賞歎ス。病者モ亦曰アラズシテ愈ユ。東洞亦東洋ノ尋常ナラザルヲ知り。厚ク之ト交ハル。東洞ノ名之ヨリ世ニ顯著ス。年五十二シテ。類聚方藥微方極ヲ撰ミ。專ラ古方醫ノ規律ヲ立ツ。喉年ニ及ビ。中津侯。祿五百石ヲ以テ。召スト。雖氏。應ゼズ。而シテ。世人或ハ其術ヲ信ジ。或ハ之ヲ疑フ者アレ氏。亦耶カモ意トセズ。安

永三年七十ニシテ歿ス。其子曰ク。東洞ハ管領島山氏ノ裔ニシテ。即チ名族タルニ由リ。奮然トシテ志ヲ起シ。太平ノ世。武術ヲ施スニ所無キヲ觀テ。刀圭ノ業ヲ以テ當時ニ鳴ラントス。而シテ。浴ヲ乞ヒ。業ヲ問フ者稀ニシテ。樞頭。蛛網ヲ張リ。釜底。塵ヲ堆スルニ至ルモ。敢テ初志ヲ屈撓セズ。遂ニ其名遠邇ニ喧傳シ。重祿ヲ以テ招聘セラレ。ニ至ルモ。亦敢テ利祿ノ爲メニ節ヲ枉ゲズ。其誓フ所ニ背ハカズ。亦名族タルニ蓋ナスト謂フベシ。夫レ始メアルコトアリ。能ク終アルコト少キハ。社會ノ通患ナリ。其志操ヲ持スル。東洞ノ如クナランニハ。終リアルニ幾幾キカ。

第十四 杉山某明ヲ失シテ鑿ニ志シタル事

杉山某ハ遠江國濱松ノ人ナリ。十歳ニシテ、明ヲ失フ。幼キヨリ、天資豪爽ニシテ、名ヲ天下ニ成サント欲スルノ志アリ。然レ既ニ明ヲ失テ、業トスベキ無シ。意ヲ鑿術ニ決ス。甫、年十七、鍼鑿トナリ。江戸ニ赴キ、日夜其技ヲ研精ス。年ヲ累テ終ニ妙解ヲ得其名大ニ發シ。四方治ヲ乞フ者、鱗至雜、還シ、蘇トシテ、鉅工トナル。公侯大人招請、處日無シ。將軍綱吉公之ヲ聞キ、召テ左右ニ侍セシム。一日公問テ曰ク、汝チモ亦欲スル所アリヤ否ヤ。對テ曰ク、有リ。臣一眼ヲ得ント欲スト。左右大ニ笑フ。公曰ク、是レ戲言ト雖、正真ニ憫ム可キナリ。予、心宅地カ一町ヲ、本所第一橋ノ側ニ賜フ。蓋シ俗此橋ヲ呼ビ、一目ト爲スヲ以テ、故ニ此命アルナリ。因テ、祿スルニ五百石ヲ以テシ、檢校職ニ任ズ。又、地ヲ京

師ニ賜シ、清、聚、菴ヲ置キ、以テ、人ト警者ノ事ヲ總メ、其專ニ救濟ヲ好ム。初メ貧キ時、尚ホ囊橐ヲ傾ク、以テ貧人ヲ贖ス。家道已ニ饒カナルニ及ド、賑恤スル所極メ、多ク警人ノ入ノ窮乏ナル者ニ放テ、最モ厚キヲ加フ。元祿七年ヲ以テ、江戸ニ渡ス。京都江戸ノ警者流、某ノ德ヲ仰キ、其像ヲ作シ、之ヲ敬禮スルニ至リト云フ。櫻所子曰ク、杉山某、十歳ニシテ、明ヲ失フ。猶ホ能ク其志ヲ勵マシテ、一技ヲ究ム。其身ヲ立テ、家ヲ興ス。此ノ如シ、兩眼明カニシテ、秋毫ノ末ヲ察ルニ足ル者ニシテ、我レ能ク事業ヲ爲スニ足ラズトスル者ハ、自暴自棄スルニ非ズシテ、何ヤ。

第十五 谷玄圃明ヲ失シテ後、詩學ニ志セシ事

谷玄圃、江ノ入ニシテ、離工ノ子ナリ、六歳ニシテ痘ヲ
 病シ、三期ヲ決ス、八歳ニシテ醫術ヲ學ビ、常ニ指ヲ以テ字
 ニ掌上ニ畫シ、書傳ヲ記憶シ、日ニ萬言ヲ誦シ、十四歳ニ
 シテ、其技粗、進シ、十七歳ハ時服南郭ガ李攀龍ハ、書詩選ニ
 講説スルヲ聞キ、詩ヲ以テ醫術ニ換ヘ、唐明諸家ハ詩ヲ講
 ゼントス、人ヲシテ之ヲ讀マシメ、一タビ聽テ即チ記シ、年
 ヲ經テ忘レズ、諸學生、解スル能ハサル所、通曉ナリ、敏ナ
 リ、後チ高蘭亭ニ從テ學フ、而後昭明ガ文選、揚上弘ガ唐書、
 高廷禮ガ唐詩、李攀龍ガ古今詩刪、李杜ガ全集ハ
 類皆能ク之ヲ暗誦ス、事ヲ策シ古ヲ談スル、始チ上
 如シ、人神仙ヲ以テ之ヲ目スルニ至ル、初メ高蘭亭ノ詩
 ヲ以テ、二數ルハ、服御部、一施シテ海内ヲ流傳シ、一時

ヲ風靡ス、聲稱縉紳ノ間ニ籍甚タリ、蓋シニ家法ヲ唐明ニ
 誦シ、意ヲ李白ニ刻シ、格調整合、紀律森嚴ナルヲ以テナリ、
 蘭亭歿シテ後チ、其門人皆玄圃ニ從フ、南郭特ニ耆壽ニシ
 テ世ニ存シ、其赤羽橋ニ居ルヲ以テ、人、之ヲ赤羽ト稱シ、玄
 圃ハ、萱葉坊ニ居ルヲ以テ、人、之ヲ萱洲ト稱ス、公卿大夫ヨ
 リ、以テ、青衿子弟、一縉流、一黃冠トニ至ルマデ、苟クモ詩ヲ學
 バント欲スル者、刺ヲ其門ニ修ヒ、ガルハナシ、南郭歿シテ
 後チ、玄圃特ニ蘭亭ノ高弟ナルヲ以テ、詞壇ニ牛耳ヲ執
 リ、玄圃既ニ詞藻ヲ以テ關東ニ睥睨シ、聲價ニ世ニ高シト
 雖、一謙讓シテ常ニ謂ラク、予ガ性聲音ニ拙ク、針按ニ拙ク、
 明ヲ失スルノ後チ、其學習スル所、百事通ズル所無シ、惟詞
 藻ノ、一他技ニ比スレバ、耿々トシテ、線路ノ明カナルアル

ハシト其歿スルノ後子門人遺稿ヲ編輯シテ六卷ト爲シ
藍水遺草ト曰フ

樓所子曰久聞ク女圃常二人ニ謂テ曰ク諸君視タル面目
一リ然ルニ不慧ナルヲ斯クハ如シ五官果シテ何ハ用ヲ
カ之レ爲サント女圃ハ六歳ニシテ明ヲ失シ其鑿ヲ學ビ
詩ヲ學ブ遂ニ蘭亭南郭ニ次テ詞壇ノ元帥タルニ至ル實
ニ我輩兩目炯然タル者ヲシテ愧慙ニ堪ハザラシム然リ
ト雖正一瞥者一シテ樹立スル所アル猶ホ此ノ如シ五官
四肢缺クル所無キ者終身碌々トシテ名ヲ成ス所無クニ
バ豈ニ獨リ心ニ愧下ザラヤ苟モ之ヲ愧ヅルキハ速カ
ニ奮勵シテ其志ヲ興起シ女圃ヲシテ笑ヲ泉下ニ忍バシ
ムルコト勿カレ

第十六 佐久間彦四郎洞巖ト號ス奥州ノ人仙臺侯ニ仕ル幼ニ

子聰慧其父親重亦都ニ祇役ス洞巖母兄の家ニ在リ書ヲ
兄ニ學ビ日夜勤習ス十歳ニ及ブコト數其兄ニ代テ簡牘
ヲ書シ父ノ許ニ贈致ス隣地事人ノ指揮ヲ煩ハルヲ皆
成ノ手ヨリ出ルガ如シ洞巖十四五歳ニ及リ頗ル繪ヲ好
ム而シテ師長無シ畫本ヲ臨摸ス好ムテ山水ヲ畫ク嘗
テ僧雪舟ガ江湖六圖ヲ觀テ連筆ハ法ヲ悟ル是ヨリ以降
畫ク所尤モ風致アリ時ニ佐久間友徳ト云フ者アリ又畫
ニ巧ミナリ仙臺侯ノ爲メニ龍遇セラレ擢テラレテ畫所
ト爲ル嘗テ洞巖ガ畫ク所ヲ觀以テ甚ク奇ナリト爲シ嘗
テ口ニ親重ニ乞フテ之ヲ養子ト爲シ其業ヲ傳ヘテ時ニ

年十七遂ニ祿百五十石ヲ發テ洞巖如年ニシテ書ヲ善クシ又書ヲ善クス然カレ臣學問ノ業ニ至テハ未ダ嘗テ之ヲ學バズ歲三十六ノ時人ノ爲メニ二喬ガ案ニ據テ書ヲ讀ム圖ヲ畫ガク其人ニ喬ノ事ヲ問フ洞巖喬ガ何人ノ婦タルヲ知ラズ大ニ之ヲ慙ダ遂ニ遊佐次郎左衛門ニ從テ學ブ經義ヲ講習シ博ク歴史ヲ究ム遂ニ儒術ヲ以テ奧淵ノ間ニ顯著ス仙臺府ノ專ラ朱子學ヲ尊信セシハ洞巖ヲ以テ嚆矢ト爲ス洞巖亦詩歌ニ巧ニシテ新井白石ト情交尤モ密ナリシト云フ

櫻所子曰ク洞巖如齡ニシテ繪事ヲ好ミ師友無クシテ造詣スレ所アル者豈精鍊深究ニ由テ得タル者ニ非ズ其年知命ニ近キニ及ビ初メテ學ニ志シ道ニ儒ヲ以テ奧淵

ニ顯ハルニ至ル是豈小成ニ安ズル者ノ能ク爲ス所ナランヤ

第十七 小川信成物學文ヲ臨摸シテ學ニ志セシ事

信成泰山ト號ス江戸ノ人ノリ幼ニシテ戲遊スル常ニ筆硯ヲ愛ス苟モ寸帛尺紙ニ遇ヘバ意ニ隨テ科斗蛇蚓字ニ似テ畫ニ似タルノ狀ヲ作ス五六歳ニ至リ頗ル字體ヲ辨ズ安永中松山敬和ト云者アリ善書ヲ以テ聞ユ嘗テ泰山ヲ見嘆ジテ曰ク斯兒凡ニ非ス且ツ書才アリト迺チ爲ニ司馬溫公ガ勸學ノ文ヲ書シテ之ニ與テ泰山臨摸シ且誦シテ念ラズ漸ク文意ヲ解シ讀書ノ人ニ益アルヲ知リ初メテ學ニ志アリ時ニ年僅ニ七歳ナリ父之ヲ喜ビ業ヲ其親ニ善キ所ノ山本北山ニ受ケシム北山授クルニ太

史公ハ文ヲ以テス泰山受ケテ之ヲ讀ミ項羽ガ書ハ以テ
姓名ヲ記スルニ足ルノ言ニ感ズル所アリ是レヨリ
復タ臨池ヲ事トセテ意ヲ決シテ書ヲ讀ム其一夕ビ謁ヲ
北山ニ執リシヨリ烈風大雨ハ雖モ未ダ嘗テ師家ハ闕ヲ
踏マズンバアラズ曾テ大ニ雪フル一巨策ヲ戴イテ之ニ
赴ク途未ダ半バニ至ラズ雪積リ重クシテ力之二勝上
ル能ハズ顛蹶シテ大ニ膝ヲ傷ツク人怒ムテ之ヲ扶ケ勸
ムテ家ニ歸ラシハレ肯シビズ遂ニ師ハ許ニ至リ痛ヲ
忍ビ業ヲ受クルヲ常ニ若シ比隣傳ハテ美談ト爲ス泰山
稍長ズルニ及ビ嶄然トシテ頭角ヲ見ハス人ノ未ダ讀ム
能ハドルノ書ヲ讀ミ闕幽ヲ發伏シ微旨ヲ推開セント欲
スルモ其坐傍常ニ老壯嬰管墨列呂商國策等ノ書ヲ置キ

巡覽シテ之ヲ讀ム衍文錯簡枯鼠聲牙讀ミ難キニ遇ル毎
ニ之ヲ校究シテ其說ヲ解了セザレバ則チ措カズ鉄玉山
ガ校定スル所ノ墨子全書ハ經說數篇ニ至テ之ガ何句讀
下ダス能ハズ其訓讀ヲ闕ク泰山發憤シテ之ヲ讀ミ素隱
攻微前後ヲ貫串シ墨子考六卷ヲ著シ竟ニ墨子全書ヲシ
テ展卷瞭然タラシム當時諸儒皆其墨子ニ大功勞アルヲ
稱ス天明五年泰山勞瘁ヲ病ムテ歿ス時二年僅二十七病
革ルニ至リ手未ダ卷ヲ釋カズ筆硯書帙枕邊ニ狼藉タリ
シト云フ

櫻所子曰ク太田錦城泰山ガ著スル所ノ經子遺說ニ序シ
テ曰ク若シ此人ヲシテ今日ニ存在セシハ一代ノ儒宗
當リニ此子ヲ推スベシト斯言蓋言ニ非ルナリ(錦城ハ

泰山ヨリ長ズルヲ五歳ニシテ同ク北山ノ美疑塾ニ在リシト云フ。泰山初メ勸學ノ文ヲ臨摸シ且ツ誦シテ學ニ志シ。太史公ノ文ヲ讀ムニ感悟スル所アリ。臨池ヲ事トセズ。烈風大雨ト雖モ取テ師家ニ至ラズシテ休止スルヲ爲サズ。顛蹶膝ヲ傷クルモ痛ヲ忍ムテ業ヲ受クルニ至ル。七歳ノ幼童ニシテ其耐忍強勉ノ氣力ハ復カニ壯年血氣ノ人ニ勝サルヲ遠シ。故ニ其書ヲ讀ムヤ人ノ未ダ讀ム能ハザルノ書ヲ擇ムテ之ヲ讀ミ古賢ノ道ヲ明カニシテ以テ後世ヲ裨ケント欲シテ之ガ解説ヲ作クル其刻苦勵精大患ノ其身ニ在ル手卷ヲ釋カザルニ至ル其世ニ益スルノ志深切ナリト謂ツバシ。泰山ヲシテ歐洲ニ生レシ人ハ波斯ノ古代ニ行ハレタル文字ヲ讀ミ東洋ノ

學ヲ一變セシ偉功ヲ以テ獨リアンケテルチユペロンニ擅ニセシメザリシナラン。今ノ洋學者中動モスレバ翻譯ノ價ヲ求ムルニ急ナルガ爲メニ原文ノ艱澁ニシテ容易ニ解了シ難キ所アレバ之ヲ脱除シ常ニ好ムテ文章ノ平易ナル者ヲ擇ムテ之ヲ抄譯スルカ如キニ比スレバ大ニ逕庭アリ。歐洲ノ學ヲ鍊修スルノ徒奮興勵精能ク泰山ノ遺蹤ヲ追ヒ世人ノ未タ譯スル能ハザル書籍ヲ擇ムテ之ヲ譯述シ幽ヲ發シ微ヲ闡カバ以テ世ヲ益スル大ナラン。是我が熱望スル所ナリ。

第十八 山中猶平告ゲズシテ京梓ヲ離レシ事

山中猶平。天水ト號ス。伊勢ノ農夫ナリ。少フシテ學ヲ好ム。產業ニ栖々シテ意ヲ經史ニ專ラニスル能ハズ。因テ京都

ニ遊學セシテヲ謀カル。其父許サズ。遂ニ告ガバシテ奔テ
京ニ之キ。備ネク。諸儒ノ間ニ遊ブ。一モ其意ニ足充スル者
無シ。遊未ダ甚ダ久シカラズシテ。囊橐都テ盡ク。窮苦得テ
言フ可カラザルナリ。然リト雖。臣未ダ嘗テ少クモ初志ヲ
折カズ。學問益勉ム。又江戸ニ至ル。浪落萬狀。傭書シテ夜食
ヲ給ス。其窮先キヨリモ甚シ。以テ憂ヒトセズ。博ク諸名士
ニ交ハル。又其意ニ充足スル者ナシ。嘗テ山本北山ヲ鑿官
某氏ノ家ニ見テ。經義ヲ論辨ス。大ニ喜ビ以テ宿望ヲ得タ
リト爲ス。費ヲ其門ニ執ル。時二年二十三。北山ハ二十九ナ
リ。是時北山業未ダ盛ナラズ。奴僕ヲ買フテ給使ニ當ツル
了能ハズ。北山躬自ヲ竈ニ當タリ。大水ハ同郷ノ東方旗山
ト共ニ水ヲ擔ヒ薪ヲ伐リ。其勞ニ服事ス。幾クモ無クシテ、

才俊ノ士門下ニ輻湊シテ。而シテ業一時ニ盛昌ナリ。天水
能ク之ヲ獎成スル尤モ多シ。天水尤モ心ヲ文章ニ留ム思
ヲ構シ草ヲ起シ。名物ヲ狀貌シ其微巧ヲ施ス。俄頃ニシテ
節ヲ成ス。老成人ト雖。臣之ト並ビ駢スル丁能ハズ。天水告
ゲズシテ郷關ヲ出テタルヲ以テ。人皆之ヲ尤ガム。天水乃
チ曰ク。産ヲ治メ業ヲ饒フハ。姊弟ニシテ足レリ。大丈夫將
サニ爲スヲアラントスルヤ。其始メ多クハ産業ヲ事トセ
ス。事ヲ好ムデ然ルニハ非ズ。彼レ此レト輕重アリテ。勢ヒ
兩全ヲ得ザレバナリ。吾道義ヲ發揮シ。名教ヲ維持シ。上ニ
大人ノ心ヲ正シ。下モ子弟ノ行ヲ率ト。往聖ニ繼ギ來學ヲ
啓クハ。數頃ノ田ヲ耕ヤシ。數斛ノ粟ヲ希ガヒ。幸ニ饑寒ヲ
免カレ。朽テ糞土ト爲ル者ニ孰與レゾヤ。事業ノ大ナルハ

學問ニ若クハナシ。家ニ居テ能ク千金ヲ致スモ、猶ホ其半ニ比スルニ足ラズ。矧ヤ其富貴必シモ、期ス可カラサルヲ。天水年二十五ニシテ、青霞亭ヲ城東本街ニ築キ、生徒ニ教授ス。三十歳ニ至ルニ、及ビ其門ニ入ル者、前後總テ五百餘人。井董堂、松浦篤所、大窪天民等、高名ハ士皆其素篤中ヨリ出ツ。寛政二年ノ春、疫ヲ病ムデ歿ス。年三十三。其精ヲ著述ニ専ラニスルヲ以テ、遺稿若干部アリ。

櫻所子曰ク、天水ハ草莽ノ一布衣、學ニ志シテ、窮苦スレド少クモ其志ヲ屈セズ。遂ニ大都ニ在テ門戸ヲ張リ、士大夫ヲ教誨スルノ地位ニ至ル。其大丈夫將サニ爲スアラントスル云々ノ語、以テ其志ノ遠且ツ大ニシテ、小成ニ安ンズル人ニ非ルヲ知ルニ足レリ。今世志ヲ學業ニ傾ケ、千里

ヲ負フテ都門ニ遊フ輩、囊底空渇シテ、窮苦如何トモスル能ハザルニ際セバ、頓ニ平生ノ志操ヲ挫折シ、復タ學業ヲ勉ムルノ念無ク、水ヲ擔ヒ木ヲ伐リ、自ラ炊爨ノ執ルノ勞ニ服事スルヲ欲セズ。漫ニ豪爽ノ言ヲ放ニシ、結落ノ行ニ摸シ、粗暴至ラザル無ク、頗ル醜陋ノ態ヲ極メ、世ノ人ヲシテ言フ可クシテ行ハルベカラザル説ヲ目シテ、書生論ト呼ビ、鄙野ノ行ヒヲ目シテ、書生風ト稱スルニ至ラシムル者ハ、他無シ。其心裡堅忍不撓ノ志ヲ樹立セズ、刻苦進取ノ操ヲ保有セザルヲ以テナリ。吁、明治ノ昭代ニ生レ、口ニ自主獨立ヲ説キ、開化文明ヲ談ズルノ徒ニシテ、寛永時代ニ於ケル東海ノ一農夫猶平其人ニ耻ル無キ者、幾干カアル。

第十九 石作貞十九ニシテ始メテ學ニ志セシ事

石作貞駒石ト稱ス。信濃ノ人。同國福島ノ山村氏ニ仕ス。山村氏ノ冢子良由少フシテ文學ヲ好ミ。駒石ガ人タルヲ愛シ。勸ルニ讀書ヲ以テス。始メテ郷先生ニ從テ。四書ハ句讀ヲ受ク。時ニ歳十九ナリ。其學ニ志シテヨリ。僻邑ノ良師友無キヲ憂ヘ。明和三年ノ春。勢州素名ニ適キ。南宮大秋ニ學バント請フ。山村氏之ヲ許シ。其給資ヲ厚フシ。以テ行カシム。駒石學ニ志ス。ハ晩キヲ悔キ。日夜誦習シテ怠ラス。寢食ヲ忘ル。ニ至ル。故ヲ以テ其學大ニ進ム。三年ヲ經テ福島ニ歸ル。邑ノ子弟皆從テ之ヲ學ブ者多シ。是ヨリ山村氏愈之ヲ敬愛シ。終ニ室老ト爲リ。治下ノ舉措其手ニ決セリト云フ。

櫻所子日。年十九ニシテ。始メテ四書ハ句讀ヲ受ク。學ニ

志ス。晩シト謂フベキナリ。然レモ日夜怠ラバ。三四年ニシテ學ヲ成スニ至ル。之ヲ行旅ノ客ニ譬フ。陸路十里ヲ以テ。尋常旅客一日ノ行程トス。而シテ以ク怠ル者ハ。三五里ヲモ旅行シ難カルベシト雖モ。晝夜兼行セバ。二十里若クハ三十里ヲ往クベキガ如シ。運歩シテ怠ラザレバ。跛者ト雖モ。猶ホ數千里外ニ達スベシ。健脚ナル者ト雖モ。路傍ノ花ニ戯レ。壚頭ノ酒ニ顛セバ。一里ヲモ行クベカラズ。人オアリ不才アリ。如ヨリシテ學ニ志スアリ。弱冠若クハ中年ニシテ。初メテ學ニ志スアリ。其志ヲ起スニ遲速アリ。其學ニ通スルニ利鈍アリト雖モ。學ムデ怠ラザレバ。共ニ達請スル所。相殊ナルヲ無シ。特リ學問ノ事ノミナラズ。人世百ノ事業皆然カラサルハナシ。

第二十 田邊希文孟子ヲ講ズルヲ聞キ志ヲ立テシ事
 田邊希文。昔齊ト號ス。元祿五年。京都仙臺侯ノ邸ニ生ル。晋
 齋幼ニシテ夙慧。一日郷先生ノ孟子ヲ講シ。人皆大驚。如
 ハ可シ。一章ハ聞キ。忻然トシテ追慕ハ心アリ。謂テ曰ク。皇
 朝。伊。副。金。及。ス。可。カ。ラ。ザ。ル。ガ。若。シ。其。他。ハ。未。ダ。學。ム。テ。至。ル。
 可。カ。ラ。ズ。ル。者。ア。ラ。ズ。ト。其。長。バ。ル。ニ。及。ビ。經。義。ヲ。以。テ。縉。紳
 ハ。聞。ニ。稱。セ。テ。ハ。晋。齋。京。都。ニ。教授。ス。ル。丁。七。年。其。名。時。ニ。著
 聞。ス。仙臺侯其爲ス所ヲ喜ビ。召見シテ月俸三十口ヲ賜
 別ニ門ヲ爲サシム。儒官ト爲リ。仙臺ニ移居ス。其職ニ在
 ル二十年。其勞ヲ賞シ。米地入三百石ヲ加賜。又儒職甚ク盛
 シ。幾クモ無クシテ。權テラレテ世子ノ傅トナリ。又四百石
 ヲ加賜ス。先ノ加フル所ト併セテ七百石。班中老ニ至ル。

其殊恩非常。世ノ君臣ノ遭過ニアラス。夫レ仙臺ハ大藩ニ
 シテ。貴重ノ臣無キニ非ズ。又文學ノ臣少キニ非ズ。然レ臣
 晋齋ノ若ク出身シテ進ミシ者ハ。未ダ聞カザル所ナリト
 云フ。
 櫻所子曰ク。中江藤樹ハ。大學ノ天子ヨリ。以テ庶人ニ至ル。
 ハ。一。壹。ニ。是。レ。身。ヲ。修。ム。ル。ヲ。以。テ。本。ト。爲。ス。ノ。章。ヲ。讀。ミ。其
 品行ヲ鍊修シ。遂ニ近江聖人ト稱セラレ。其徳一地方ヲ薰
 陶シ。歿後猶ホ里閭ノ崇敬スル所トナル。田邊晋齋ハ。孟子
 ノ人ニナリ。堯舜タルベシ。ノ章ヲ講ズルヲ聞キ。學ムテ至ル
 ベカラザルナシトシ。志ヲ勵マシテ學業ニ從事シ。遂ニ一
 大藩ノ中老ト班列スルニ至ル。而シテ尋常儒士ハ。日ニ孔
 孟仁義ノ道ヲ談ジ。六經ヲ誦ンズルニ至ルモ。終生碌々ト

シテ人ノ後ヘニ在リ。蠹魚ト伍ヲ同フスルノミ。讀ム所ノ書ハ則チ同一ニシテ。収ムル所ノ結果此ノ如クノ差アル者何ゾヤ。曰ク唯志ヲ立ツルト否ラザルトニ在ルノミ。之ヲ醫。藥劑ヲ調和スルニ譬フ。庸醫ノ之ヲ用ユルキハ。キナモルヒホト雖モ起死回生ノ功ヲ奏スルニ足ラズ。偶以テ患者ヲシテ夭折セシムルノ懼レアルノミ。而シテ良醫ノ之ヲ用ユルキハ。牛溲馬勃モ善ク人ヲシテ壽域ニ躋ボラシムルノ材料トナルガ如シ。今ヤ開明ノ隆運ニ属シ。我輩ガ蒙ラザキ。我輩ガ頑ヲ兼ニシ。我輩ガ懦ヲ起ス。良藥其料ニ乏シカラズ。制羅古賢ノ言行得テ知ルベク。歐米前哲ノ論理得テ聞クベシ。然リト雖モ假令之ヲ知り之ヲ聞クモ。躬ニ行フノ志無クシテ。恰カモ庸醫ニシテ。多クノ良藥ヲ貯藏スルガ如シ。昔日ノ腐儒ト一輩ノ人タラシムル者幾ンド希ナリ。思ハザル可ケンヤ

第廿一 永富鳳介幼ニシテ古人ノ節ヲ慕ヒシ事

永富鳳介ハ獨嘯菴ト號ス。長門ノ人。年十一ニシテ。古人ノ節ヲ慕ヒ。經史ヲ讀ムヲ好ム。既ニシテ良師友無キヲ憂ヘ。一夜青錢百文ヲ持テ赤馬關ニ走リ。舟ヲ買テ將ニ東遊セんとス。或人諭シテ曰ク。兒ハ實ニ兒ナリ。百錢以テ千里ニ遊ブ可キヤト。鳳介笑テ曰ク。子ハ乃チ何ゾ。過ナル。父母之ヲ聞カハ。人ヲシテ追ハシムル必セリ。固ヨリ遠遊ヲ許サズト。遂ニ京都ニ至リ。居ル。小期年意ヲ得ズシテ歸ル。後チ裁ニ至リ。山縣周南ニ師事シ。晝夜學々トシテ讀書ヲ廢セズ。群籍ヲ涉獵スル。丁。人ニ陪從ス。二十歳ノ時。京都ニ遊ビ。

揚子山嶺東洋ニ謁ス東洋其塾ニ寓セシメテ之ヲ優遇
ス鳳介始メ醫ヲ喜バズ東洋ノ言ニ感激シ志ヲ醫術ニ專
ラニス鳳介東洋ノ門下ニ在ル其聲名早ク京都ニ著顯シ
後々大阪ニ僑居スルニ及ビ其業益東洞ト雁行シテ名
聲遠邇ニ喧傳スト云フ

鳳介醫ヲ以テ業ト為スト雖ドモ其志ハ經世ヲ以テ自ラ
任ズ其言ニ曰ク道ヲ學フハ志ナリ醫ヲ行フハ業ナリ敢
テ志ヲ以テ業ヲ廢セス業ノ為メニ志ヲ棄テズ夫レ志ハ
勉メザル可カラス夫レ業ハ精ナラザル可カラスト
撰所子曰ク志アリト雖止恆産無ケレバ以テ其志ヲ成ス
ニ足ラズ業ニ精ナリト雖氏志シトケレバ解語ノ器械ノ
如シ志ニ勉メ業ニ精ニシテ真無有用ト人タル可シ鳳介

其志ハ年僅カニ一ニ行シテ決然郷關ヲ去テ良師汝ヲ求
ム其業ハ海内醫術ノ冠冕タリシ吁亦偉ナル哉

第廿二 宮瀬維翰乞食シテ江戸ニ入りシ事

維翰通稱三古衛門龍門ト號ス紀州ノ人ナリ寛保元年ノ
四月、父ヲ負フテ江戸ニ赴ク驛舎ニテ盜ニ遭ヒ資銀ヲ喪
フ乞食シテ關ニ入ル湯島菅原祠官某ノ家ニ寓スル一
年ニシテ後々湯島切通坊ニ僑居ス窮迫殊ニ甚シ備書シ
テ食ヲ給ス嘗テ鞭ヲ股南郭ニ委シ芙蓉社ニ入ル門下ノ
士其能ヲ妬忌シ惡聲數臻ハ是ニ於テカ快々トシテ望ミ
ヲ失フテ引去ル退テ大經ヲ修メ敢テ世ニ交ハラズ名聲
大ニ起ル門人益進ミ其業頗ル盛ナリ諸侯之ヲ聘スル者
アリト雖氏皆辭シテ起タズ當時文章家ト稱スル者ハ服

南郭餘熊耳ニ推服ス。龍門ハ名之ニ亞グト云フ。其經義ヲ推ス者ハ太宰春臺宇瀦水ニ減ヒス。晚年ニ至テ交遊海内ニ適ネシト云フ。

櫻所子曰ク龍門初メ江戸ニ遊ブ。乞食シテ關ニ入ル。其都門ニ寓ズル。傭書以テ飢寒ヲ支フ。之ニ加フルニ南郭ノ門ニ入り。同門ノ士ノ其能ヲ妬ミ。南郭亦讒間ヲ信ジテ之ヲ厭薄スルニ至ル。其困頓思フベキナリ。然ルニ龍門屹然トシテ其志ヲ屈ヒズ。終ニ一時ノ文宗タル春臺南郭ト名ヲ齊フスルニ至ル。今世學資ノ乏シキヲ訴ヘ。衣食ノ計ヲ爲リバルヲ得ザルヲ以テ。眼ヲ戴藉ニ注グノ餘暇無キヲ口實トシ。良師友無キハ學フコトヲ得ズト爲ス所ノ青年ハ是恰カモ遊手徒食ノ徒。資本紙キヲ以テ。商業ニ從事ニ難

シト爲シ。田畝ヲ有セザルヲ以テ。農タルニ由シナシトシ。坐シテ凍餓ヲ待ツト。大ニ異ナルヲ無シ。視ヨ古來豪農大估。富ヲ陶猗ニ比スルニ至リシ者モ。其創業ノ祖ハ。僅少ノ資本ニ過ギス。一世ノ泰斗タル大學士。多クハ學資ナキ貧賤ノ家ニ生レ。師友無キ荒僻ノ地ニ長ズ。然バ則チ資本ナク田畝無キヲ口實トシテ坐食スルモノハ。農商ノ産業ニ從事スルニ志シ無キ者ナリ。學資無ク師友無キヲ辭柄トシテ學ハサル者ハ。學ニ志シ無キ者ナリ。然レハ則チ遊手者ハ。就産ノ資無キヲ憂ヘズシテ。就産ノ志無キヲ憂ヘヨ。無學者ハ。學資ト師友ノ乏キヲ憂ヘズシテ。唯就學ノ志無キヲ慨歎セヨ。苟モ之ヲ爲スニ志アラバ。何事カ成ラザランヤ。若シ然ラズトセバ。請フ古來豪富者ノ始祖ト盛名ノ

學士トヲ視ヨ。朱熹ノ所謂萬事成ラザル。須ク吾志ヲ責ム。ベシトハ、真ニ確言ナル哉。

第廿三 富士谷成章志ヲ專ラニシテ國書ヲ討究セシ事

成章ハ層城ト號ス。皆川淇園ノ第タリ。幼ニシテ敏慧群兒ニ異ナリ。九歳ノ夏、韓使來聘セシ時、韓人ト筆談ス。其妙齡ニシテ才氣アリ。應答ノ速カナル。韓人亦大ニ驚嘆セリ。長ズルニ及ビ、汎ク群籍ヲ涉獵シ。自ラ以爲ク、近キヲ舍テ、遠キヲ求メ、日ヲ賤ムテ、耳ヲ貴ブ。ハ世人ノ常態ナリ。聖經賢傳ト雖、凡外邦ノ事ノ若カズ。吾邦ノ典籍ヲ講習セシニハト。是ニ於テ國史律令ヨリ、家乘遺集ニ至ルマテ、遍ネク搜索シテ、考覈セザルハ無シ。又國風ヲ學ビ、其咏出スル

所、萬首以上ニ至ル。其詩ヲ賦スルヤ、能ク一夜ニ行五言律百首ヲ作クレリ。又其咏物ノ詩、本邦ノ故事ノミヲ用キ、唐土ノ故事ヲ以テ材料トセザルハ、新井白石ガ日本詩史ニ載スル所ノ香ヲ咏ズルノ詩ノ外、亦見ザル所ナリトイフ。其造詣スル所知ルベキナリ。今左ニ其扇ヲ咏スルノ詩一首ヲ録ス。

開時蟻嘯巧搖翅。搨去鷓鴣不發聲。大堰錦波春十里。弘微繡帳月三更。賭棋秀娃裁詞藻。按譜才郎擅品評。執自蠶縲七骨。由來枉得合歡名。
櫻所子曰ク、近キヲ舍テ、遠キヲ求メ、日ヲ賤ムテ、耳ヲ貴ブハ、社會ノ通弊ニシテ、善ク希臘羅馬ノ歴史ヲ讀ムズルモ、我邦ノ沿革ヲ知ラズ。徒ニ歐米ノ風俗ヲ尊信シテ、我邦

ノ習俗此ニ超駕スル者アルヲ覺トラズ。動モスレバ外人
狡獪詭智ノ擧ニ倣ヒ。我邦固有ノ良風美俗ヲモ頑固ノ弊
習ト併セテ。之ヲ棄擲シ。玉石共ニ焚クニ至ラントス。豈ニ
慨然タラサルヲ得ンヤ。視ヨ佛人ハ佛國ヲ稱シテ。歐洲文
明ノ中心トシ。英人ハ英國ヲ稱シテ。地球最第一ノ國トシ。
米人ハ其聯邦ヲ以テ。世界無比ト唱フ。其言稍偏倚スルニ
似タリト雖。氏亦愛國ノ心衷。言外ニ溢ル。今世輕佻ノ士。動
モスレバ歐米ノ文化ニ心酔シテ。自國ヲ輕視ス。何ゾ愛國
ノ心ニ乏シクシテ。遠ヲ求メ耳ヲ貴ブノ甚シキヤ。吁。成章
ノ如キ。識見アル者ト謂フベキナリ。

第廿四 藤釣寫生ノ妙訣ヲ自得セシ事

藤釣字ハ景和。若冲ト號ス。享保二年。京都錦小路ニ生ル。家

商ヲ業トス。若冲幼ヨリ畫ヲ好ム。家貧富饒ナルヲ以テ。草
値ヲ吝マズ。古畫若干ヲ購テ。之ヲ學ブ。初メ狩野氏ノ畫ニ
學ビ。其法ニ通ズ。自ラ以爲久。是ハ狩野一家ノ法ハ。吾之
ヲ善クスト。雖ドモ。狩野氏ハ。園蹟ヲ脱セズト。之ヲ舍テ。
宋元ノ畫ヲ臨移スル。年アリ。然カレヒ心ニ契ハズ。一日
大ニ省悟スル所アリ。庭前ニ坑ヲ穿テ。火ヲ活シテ。年來學
ズ所ハ。畫軸ヲ以テ。盡ク焚如ニ付シテ。曰ク。遠筒ノ技術。何
ゾ。肩ヲ古人ニ比スル。ハ。能ハザランヤ。彼レモ。物ヲ描クナ
リ。我亦其描ク所ニ由テ。描カバ。是物ト一層ヲ隔ツルナリ。
今ヨリ。親ク物ニ就テ。筆ヲ把ルニ。若カサルナリト。是ヨリ
諸バ禽蟲花卉ヲ熟視シテ。畫カントス。然レ世孔翠鸚鵡。
類ハ。常ニ見ルベカラズ。唯。司展會ハ。人家ニ畜フテ。馴ル。

所物ニシテ其毛羽亦五彩ヲ施スベシ先ヅ之ヨリ始ム
ベシト數十ノ雜ヲ窓下ニ畜養シテ之ヲ描キ鍛鍊數年遠
ニ草木ノ華葉羽毛鱗介ニ至ルマデ寫生ノ妙ヲ自得シ筆
ヲ下シ彩ヲ施ス渾テ意匠ヲ以テ之ヲ成シ聊カモ古人ノ
法ヲ蹈襲スルヲ無シ故ニ終生龍虎鬼神ヲ畫カズ其繪事
ニ耽ル此ノ如クニシテ生産ニ疎キヲ以テ家道零替シ口
ニ畫ニ糲スルニ至レリ米一斗ヲ以テ一幀ニ換ル故ニ自
ラ斗米庵ト號ス
櫻所子曰ク若冲ノ繪事ニ志スヤ初メ和漢ノ古畫帖ニ就
テ習鍊多年意ニ契ハズ遂ニ碌々人ノ後へニ在ルヲ羞矣
更ニ寶物ニ就テ精研シ以テ寫生ノ妙訣ヲ自得スルニ至
ル今世口ニ經世濟民ノ學強兵富國ノ術ヲ談スルノ徒尚

ホ碌々人ノ糲粕ノ哺ヒ一隅ヲ據テ前賢往聖ニ彷彿タル
ヲヲ思ハス翻テ他ヲ罵テ獨立自主ノ氣象ニ乏シト為
ス何ゾ其顏ノ厚キヤ

第廿五 休翁晚年國歌ニ志セシ事

休翁ハ和泉國堺ノ豪商ナリ茶儀ニ熟セリ其奴僕ヲ遇ス
ル骨肉ノ如クス故ヲ以テ家道日ニ盛リナリ或時京師ニ
至リ初メテ某大納言ニ謁ス談國歌ニ及ブ大納言曰ク汝
ニ和歌ヲ學ベルヤト曰ク未ダ之ヲ學ハズ曰ク然ラバ我
レ汝ヲニ語ランルソ一家ノ主翁トシテ多クノ奴僕ヲ使
役スル者ニシテ心ヲ文雅風流ニ留ムルヲ無ケレバ則チ
其爲ス所偏固ニシテ一片ノ和氣無シ修身齊家ノ道ハ和
ヲ知テ和シ禮ヲ以テ之ヲ節スルニ非レバ人服セズ且ツ

和泉國堺ノ豪商ナリ

版ノ國歌ヲ誦ス。半之丞問テ曰ク。誦スル所ハ何事ゾ。曰ク
 和歌ナリ。曰ク。是レ上古神明ノ傳フル所ナルカ。將タ人ノ
 作ル所ナルカト。客笑フテ曰ク。亦人ノ作ル所ノミ。曰ク。學
 ムテ能ク不可キカ。曰ク。然リト。因テ略其法ヲ授ケ。且ツ曰
 ク。歌ハ至誠ヲ以テ木ト爲ス。此ヲ以テ心ニ存シ。感觸シテ
 言ニ發マレバ。以テ天地ヲ動カシ。以テ人神ヲ感ズベシト。
 半之丞大ニ悅ビ。謝シテ還ル。茲レヨリ志ヲ國風ニ留メ。喜
 悲笑驚ルハ。耳目觸ルハ。所心意動ケ所。一ニ皆之ヲ詠歌ニ
 發ス。半之丞本ト眼ニ一打無シ。故ヲ以テ意餘リアツテ言
 達セズ。人傳テ以テ笑實ト爲ス。而シテ半之丞恆ネ曰フ。
 卒然注ヲ祠前ニ受ケ。吾歌必ス明神ノ冥贊ニ出ツ。然ラズ
 シバ。吾儕鄙人。惡シク飲ク斯ニ與カランヤ。ト自ラ信シテ。

疑ハズ。其大資朴直ノハ大率ナリ。此ニ類ス。村淡路守戸田侯
 ノ封邑ニ係ル。代官某國歌ヲ善クス。其志ヲ嘉ミシ。時ニ往
 テ古歌ヲ講授シ。且ツ其詠ズル所ヲ刪正シ。爲ニ國字ヲ書
 シ。與ヘテ之ヲ學バシム。居ル數年。詞稍修マル。期滿チテ代
 官還ル。吉田驛樂鋪ノ姫歌ヲ大納言芝山持豐ニ學ビ。名旁
 近ニ噪ク。代官ニ繼テ諄誨ス。業大ニ進ム。其合作ニ至テハ
 天趣高絶。古人及ビ易スカ。ラザル者アリ。或時姫ニ從テ京
 都ニ至リ。大納言ニ謁ス。試ミニ命ジ。貴道戀ヲ詠セシム。納
 言吟誦數回。稱シテ曰ク。是レ洵ニ純乎タル天籟。自然格ニ
 入ル。患ヒ邪マ無キニ非ス。ハ何ヲ以テカ之ニ能クセン。
 圖ラザリキ。古人ヲ今世ニ視ント。ハト咨嗟之ニ久シ。因テ
 號ヲ磯丸ト賜ヒ。爲ニ之ヲ掄揚ス。名衣冠ニ噴々タリ。還ル。

ニ及テ遐邇傳稱、以テ奇榮ト爲ス。天使東下、及ビ公卿
 ハ東海ニ過ケル者、往々迂路其廬ヲ訪フ。名聲登々トシテ
 起ル。是ニ放テ土人相議シテ曰ク、吾土僻陋ニシテ、衣冠親
 臨スルハ未ダ嘗テアラズ。而シテ今始ハテアリ。土人榮々
 ハ大ナリ。而シテ敗屋陋窶ナル。亦土人ハ辱ナリ。因テ力
 コ戮ハセ、背ヲ捐テ、屋ヲ構ヒ之ヲ與フ。且ツ推シテ、正
 ト爲シ、磯モ大ニ愕キ、堅ク拒ム。デ曰ク、吾無能無識ニシテ
 且一寒族タリ、何ゾ敢テ當ランヤト。衆強一舎カズ、因テ里
 正ヲ辭シテ其居ヲ受ケ、但、名流ノ過ケル毎ネニ之ヲ此ニ
 延ク。去ルニ及バ、輒チ饋餼シ。家ニ還テ漁具ヲ修繕シ、兒
 孫ト事ニ從フ。未ダ嘗テ諷詠ヲ以テ務ヲ廢セズ。磯ル姪斐
 事畢リテ、江戶ニ遊ブ。公侯爭テ之ヲ延ク。遠藤但馬守、新見

伊賀守ニ氏尤モ之ヲ寵異ス。常ニ二氏ノ邸ニ宿ス。木南文

高千春ト密友タリシトイフ

櫻所子曰ク、磯如僻郷ノ寒族然カモ本ト丁字ヲ知ラズ。遂
 ニ國風ヲ以テ、名ヲ月卿雲客ノ間ニ揚グ。是レ其居心制行
 正直ニシテ、語黙動靜、造次顛沛、意志ヲ國歌ニ注キ、其諷詠
 スル所、思ヒ邪マ無ク、三百篇ノ作者ト、其妙ヲ同フスル所
 以ナリ。命意新ナリト雖氏、措辭巧ミナリト雖氏、言苟モ偽
 飾ニ出ヅレバ、假令太平ヲ粧點シ、休明ヲ鼓吹スルノ一端
 ニ供スベキモ、何ゾ天地人神ヲ感動スルノ妙處ニ達スル
 ヲ得ンヤ。況マ假リテ以テ桃李ノ妖色ヲ賣リ、花鳥ノ使音
 ヲ通ブルノ具ト爲スガ如キニ至テハ、其風俗ニ害アル大
 ナリ。磯カノ事、其篤志ト至誠トハ、以テ學術技藝ヲ講習ス

者ノ模範ト爲スベシ。豈ニ特リ國風ノミナラシヤ。

第廿七 佐藤隆岷葵章ノ衣ヲ被ルヲ誓ヒシ事

佐藤隆岷ハ會津ノ人活菴ト號ス。少フシテ志氣ヲ負ヒ。名ヲ天下ニ成カント欲ス。其初メ郷關ヲ出ル。自ラ誓テ曰ク。吾葵章ノ衣ヲ衣ズンバ。復タ生キテ還ラズト。葵章ハ即チ幕府ノ徽號ナリ。江戸ニ來リ故人某ニ依ル。某ハ賈人ナリ。專ラ會計ヲ事トス。隆岷久シカラズシテ乃チ去ル。然レ氏常居無シ。處士ヲ以テ高門雅子ノ家ニ客タリ喜ムテ書ヲ誦シ。易論語老莊傷寒論。古今和歌集ヲ背誦ス。最モ軒岐氏ノ術ヲ好ム。其術ニ於テ自得スル所アリ。然レ氏其性善ク罵ルヲ以テ世ノ爲ニ容ラレバ。僅カニ按摩ヲ業トシ。以テ活ヲ爲ス。時ニ汝留橋ニ酒店アリ。饅頭ヲ以テ名アリ。每暮

客三人アリ來リ喫ス。饅頭一餅酒一鉢。是ノ如クスル者數歲未ダ嘗テ一タモ之ヲ發セズ。主人恠ムテ之ヲ問フ。皆云テ吾輩風志アリ。成ラザルヲ恐ル。故ニ此ニ藉リ。以テ氣カヲ助クルハ心ト。三人其二ハ行商其一ハ隆岷ナリ。之ニ久クシテ隆岷一屋ヲ芝濱ニ僦シ。既ニ屋值ヲ與フ。屋主更ニ酒資ヲ索ム。應ゼズ。則チ中ルニ冷語ヲ以テス。隆岷大ニ怒テ之ヲ罵ル。偶ニ俠某ノ過ギ觀ルアリ。曉諭兩解ス。遂ニ隆岷ヲ引テ歸リ。款待甚ダ至ル。某多ク拳勇少年ヲ養ヒ。號シテ親分ト曰フ。是ニ放テ人ニ告ゲテ曰ク。吾奇兒ヲ得タリト。隆岷之ヲ聞キ罵テ曰ク。吾豈ニ汝輩ノ養子タルモノナラシヤト。某謝シテ留ム。肯ンゼズ。杖ヲ振テ去ル。初メ荒川土佐守ノ妻疾ム。十餘年醫藥一効無シ。隆岷ヲシテ之ヲ診

七シメ。試ニ處劑如何ト問フ。隆岷忽テ罵テ曰ク。君ハ醫
人ニ非ズ。烏ゾ醫術ヲ知ラズ。然レモ吾ガ術疎ニシテ人
爲ニ信ズ。ハハス。亦愧ルニ足ル。ハミ。即チ拳ヲ奮テ藥籠ニ
亦破シ。保然トシテ去テ顧ミズ。上佐守曰ク。奇士ナリ。術モ
亦應サニ奇ナルベシト。乃チ疾ヲ治セシム。遂チ獲テ然ル
後チ醫名大ニ發人。上佐守清水府ノ老ト爲リ。及ビ建白
シ。其侍醫ト爲人。是ニ於テ隆岷蔡章ノ衣ヲ賜ヒ。果シテ
其誓ヒテ遂グ。向キノ二商モ亦各其志ヲ成スト云フ。
標所子曰ク。舊幕ノ時蔡章ノ衣ヲ服スル。未ダ駟馬ノ車ニ
出ス。トキ。アラザリルモ。亦以テ衣錦ノ榮ニ視ラフベシ。隆
岷東隱。一布衣ニシテ。其郷土ヲ去ル。蔡章ノ衣ヲ衣ズン
後。隆岷。隆岷ヒリ。ハテ誓フ其志ヲ立ツル小ナリト謂ハ

カラズ。而シテ其性善ク罵ルモノ。固ヨリ美德ニ非ズト雖
氏之ヲ門ヲ掃ヒ壘ヲ拜シテ。俸給ヲ得ントスルニ汲々
ル者ニ比スレバ。固ヨリ日ヲ同フシテ論ズベキニ非ズ。且
ツ人ノ爲メニ知ラレズ。按摩ヲ以テ生計トスル。數年ノ久
キニ及ブガ如キ。亦耐忍ノ至レルモノ。アラズヤ。其獨介
ニシテ世ニ阿ラス。言行ノ奇ナルヲ以テ。遂ニ荒川土佐守
ノ知ル所トナリ。蔡章ノ衣ヲ衣ルノ誓ヲ遂グルニ至ル。亦
奇遇ナリト謂フベシ。我便倭ヲ以テ榮華ヲ博セントスル
者アルヲ視ル。而シテ獨介ニシテ且ツ善ク罵ルヲ以テ利
達ヲ得ル者ハ。隆岷ニ於テ始メテ之ヲ視ル。是蓋シ其志操
ト勉耐ト人。尋常ニ超出スルガ致ス所ナリ。

第廿八 山岡純一郎志ヲ槍法ニ專ニシタル事

山岡紀一郎靜山ト號ス江戸ノ人家世幕府ニ仕テ其人ト
ナリ剛直ニシテ阿ネラズ朴素ヲ重ニシ氣節ヲ尚トフ靜
山幼キ時刀槍射騎水泳讀書習字發憤勉勵セザルハ無シ
年十九ノ時省悟スル所アリ慨然トシテ曰ク我レ今ヨリ
精ヲ專ラニシ槍ヲ學バンハト二十三歳ニ及ビ名都下
ニ轟ク用ユル所ノ長槍必心槍ト曰フ其源管丞相道真ヨ
リ出ヅト云是時ニ當リ筑後ノ人南里紀介枝ヲ以テ海内
ニ鳴ル靜山就テ問フ南里將サニ國ニ歸ラントスルヤ靜
山ト一タビ較ベ以テ訣別ヲ告ゲント欲ス是ニ於テ試法
ヲ相較ス辰ニ起デ午ニ至ル神出鬼沒輸贏未ダ判ゼズ操
ル所ノ各槍鋒夫摧破ニテ寸餘無ク以テ靜山ノ技當時ノ
槍術者流ガ精神活潑妙機ヲ失シ血戰ノ實境ヲ遺レ徒

ニ花法美觀ヲ務ムル者ト相同シカラザルヲ見ハニ足レ
リ常テ疔ヲ鼻下ニ發ス痛甚シ技ヲ操ル常ノ如シ鑿之ヲ
止ムレバ聽カズ月餘ニノ愈ニ又瘡ヲ患フ瀨起ル毎ニ場
ハハニ弟子ト技ヲ較ス此夫以テ瘡ヲ去ル靜山操ル所ノ
木槍重中四斤ナル者七斤ナル者十五斤ナル者アリ其槍
ヲ學ブ總照凡ニ非ラズ常テ昇平日久フシテ士風ノ柔惰
ナルヲ慨シ自ラ古ノ士ニ企及センコトヲ期シ緩急用ニ應
ジテ國難ニ徇ヒ以テ士職ヲ盡サンコトヲ庶幾スルヤ嚴冬
寒夜繩ヲ以テ腹ヲ約シ氷ヲ敲キ水ヲ灌キ滿身淋漓スリ
東ニ向テ日光廟ヲ拜シ叩首黙禱以テ時場ニ入り十五斤ノ
槍ヲ操リ突衝ノ勢ヒヲ作ス丁ニ十回三十夜ヲ極メテ止
ム毎年此ノ如シ平居晝ハ門人ニ教授シ夜ハ則チ突衝ノ

勢ヲ作ス。三。千。或ハ五。千。或ハ黃昏ヨリ雞鳴ニ至ルマデ。
三。萬。ニ。及。フ。管。テ。竹。七。八。尺。許。リ。ヲ。斫。リ。之。ヲ。把。リ。高。袞。ヲ。踏。
ム。テ。弟。子。ト。試。較。ス。槍。ニ。異。ナ。ラ。ズ。或ハ鐵扇ヲ操リ。以テ槍
手ニ敵ス。靜山技術既ニ神妙ト稱ス。又德義ヲ以テ聞ユ。嘗
テ西郊ニ侍寺ニ賽ス。衆アリ二十人バカリ。一人ヲ圍繞シ。
拳。撻。交。下。ル。鮮。血。淋。々。死。ニ。垂。シ。ト。ス。靜山衆ニ謂テ曰ク。何
物。狂奴ゾ。敢テ毆擊ヲ行フ。地ニ僵ル。者哀叫シテ曰
ク。山岡先生請フ我ヲ救ヘト。靜山衆ニ對シテ懇諭ス。曰ク
聽カズ。是ニ於テ群中ニ突入シ。喝シテ曰ク。窮鳥懐ニ入ル
獵夫殺リス。况ヤ士人ノ敵ヒヲ求ム。而シテ我豈坐視スル
ニ忍ビシヤ。汝ダノ敵ハ即チ我ナリ。請フ來テ我ト戰ヘト。
張敢テ動カズ。靜山地ニ僵レタル者ヲ視レバ。ウチ舊ト嘗

テ贊チ執リ技ヲ習ヒ。後チ背キ去リ。其ノ人金子衆
ニ借テ還リ。故ニ今此地ニ遭ル。靜山金子懷ニ取リ其負
債ヲ來ニ償ヒ。別ニ數金ヲ取テ其人ニ與ヘ。脱後。如ヘテ
之ヲ遣ル。靜山嘗テ人ニ語テ曰ク。凡ソ人ニ勝タント欲
レバ。須ク先。德ヲ已レ。ニ修ムベシ。德勝テ敵自ラ屈ス。是
ヲ之レ真勝ト爲ス。若シ技藝ハ擊刺ニ由テ得可シト謂ハ
バ。則チ大ニ謬レリ。故ニ精シカラント欲スレバ。須ク先。ジ
數酒遊行ヲ禁ス。ベシ。必ヤ時トシテ精神ヲ收ニ存セ。ル
ハ。無ク。往クトシテ着實事ヲ行ハ。ガ。ル。ハ。無シ。則チ妙境ニ
臻ル。庶幾ス可キナリト。又曰ク。人ノ宜ク我ムベキ者ハ驕
傲ナリ。一驕心ニ入レバ。百藝皆廢ス。既往ヲ回視ス。我
心。亦。免。カ。レ。ズ。一。念。此。ニ。至。ル。每。ニ。慚。汗。背。ヲ。浴。水。ス。一。覺。工

此ハ大ナリ。安政二年六月暴カニ歿ス。年二十七。其歿スル
 二先ダツ一日母氏靜山ノ重槍ヲ使フヲ視。其太ダ憊ル
 ヲ患。靜山曰ク。兄之ヲ標ル手槍ト異ナル無キナリト。程
 日曉ヨリ諸寮子ト標習スル常ノ如シ。但肉色頗ル白ク。肌
 會澤無キヲ見。弟子以テ告ク。靜山笑テ言ハズ。是日シテ
 卒ト云フ。

櫻所子曰。攝人市村水香ガ釣魚記ヲ讀ム。其文ニ曰ク。吾家
 激江ニ湖ス。江ニ一漁者アリ。釣鯉ニ工ミナリ。他人及ブ能
 ハズ。吾嘗テ其術ヲ問フ。漁者曰ク。他無シ。專ト精トニ在ル
 ハ。初メ余ノ釣鯉ヲ學ブ。終日ニシテ一ヲ獲ズ。是ノ如
 キモ。數十日退ラ之。思フ曰ク。是鯉ノ香ニカウザルナ
 リ。器ノ良カラザルノ由ト。乃チ其餌ヲ香バシフシ。其釣

竿トチ良クシ。往テ釣ル。又獲ル所無シ。是ノ如キ者數ニ
 退ラ再ビ思フ。曰ク。是レ徒ニ餌ノ香バシキノミ器ノ良キ
 ノミ。未ダ其方ヲ獲サルナリト。是ニ於テ晨起江ニ到リ。左
 視右顧。水ノ深淺ヲ測カリ。鯉ノ游泳ヲ窺テ釣ル。須臾ニ
 テ大鯉魚アリ。撥刺トシテ釣ニ上ボル。是レナリ。復タ塵餌
 無シ。世ノ江ニ釣ル者。鯉ヲ釣テ獲レバ。輒チ去テ鯉ヲ釣
 ル。鯉ヲ獲ザレバ。輒チ去テ鯉ヲ釣ル。終ニ一ヲ獲ル能ハズ。
 是豈釣魚ニ拙キノミナランヤ。其心事ヲニシテ思ヒ。精ナ
 ラザレバ。ナリト。吾之ヲ聞テ。感スル所アル。世ノ藝ヲ學
 者。書ヲ學ム。デ成ラザレバ。輒チ去テ文ヲ學ビ。文ヲ學ム。デ
 成ラザレバ。輒チ去テ詩ヲ學ビ。書ヲ學ブ。其心事ヲナラズ。
 思精ナラザル。是ノ如シ。宜ナル哉。其成ル所無キヤ云々。

先後兢テ起ル。而シテ海内ノ士、人才ヲ論ズル者、先ヅ指ヲ
藤田東湖ニ屈ス。東湖ハ即チ斌卿ノ號ナリ。斌卿ハ常陸ノ
人世、水戸藩ニ仕フ。斌卿幼ニシテ奇穎、稍長ジテ武藝ヲ嘗
ミ甚ダ讀書ヲ喜バズ。日ニ馬ヲ馳セ劍ヲ試ム。年弱冠ニ踰
エ慨然トシテ自ラ奮テ曰ク、絳灌文無ク、隨陸武無キ。古人
ノ笑フ所、丈夫何ゾ學バザランヤト。遂ニ刻苦書ヲ讀ミ、父
ノ喪ヲ守ル。進物番ニ補シ、彰考館編修ト爲リ、總裁ノ事ヲ
攝ス。斌卿書ヲ總裁ニ致シ、館中ノ五事ヲ論ズ。文辭雄健ナ
リ。人始メテ其カヲ學ニ專ラニセシ。丁チ知ル。黃門齊昭ノ
初メ封ヲ襲フ。斌卿ノ異才アルヲ知り、擢デ、郡奉行ト爲
ス。三々ビ遷テ側用人ニ至リ、馬廻番頭ニ班ス。侯方ニ一藩
ノ人才ヲ網羅シ、内外ニ布列シ、皆號シテ職ニ稱フト爲ス。

而シテ古今ニ通ジ、事體ニ達スルニ至テハ、則チ斌卿蓋シ
之ガ冠タリ。故ニ侯ノ眷遇尤モ渥シ。入ラハ則チ機密ニ參
與シ、出テハ則チ四方ニ應對シ、議論風生ジ、事留滯無シ。侯
新令ヲ出ス、毎ニ斌卿一ニ筆ヲ秉リ、頃刻ニシテ成ル。辭理
明暢ナリ。當時水藩文武ノ士、其人ニ乏シカラズト雖ヒ、斌
卿ヲ推シテ全才ト爲ス。侯ガ施爲人ノ意表ニ出デ、人ノ耳
目ヲ驚カセシ者、斌卿尤モ力アリトス。弘化元年斌卿罪ヲ
獲テ小梅村ノ別墅ニ屏居ス。爾後專ラ學ヲ攻メ、群書ヲ覽
闕ス。數歳ニシテ郷里ニ歸ルヲ聽ルサレ、尋テ亦親故ト往
來スルヲ得、遠近欵ヲ乞フ者、日ニ門ヲ填ム。嘉永六年、侯命
ヲ幕府ニ受ケ、防海ノ政ヲ議ス。乃チ斌卿ヲ召ス。江戸ニ至
テ原職ニ復ス。天下風采ヲ相望ス。而シテ斌卿風トニ尊攘

大義ヲ主張ス、然レモ持論トスル所、或ハ時ト欲悟スト
雖モ報國ノ誠ハ則チ確然トシテ撓マズ、侯又斌卿カ、文
武ヲ無スルヲ以テ命ジテ、學政ヲ總督セシム、幾クモ無ク
江戸地大ニ震フ、斌卿是日ヲ以テ歿ス、享年五十、即チ安政
二年十月ナリ。
櫻所子曰ク、東潮ガ尊攘ヲ主唱シ、名聲一時ニ甲タル者、常
ニ異能、士ヲ延キ、酣暢談論シ、時ニ或ハ詩賦唱酬、詞采煥
發、能ク憂國ノ志士ヲシテ、一讀ノ下ニ切齒扼腕セシムル
者アルニ由レリ、而モ其學ニ志スハ、弱冠ヲ踰ユルノ後ニ
在リトス、年已ニ長ジタルヲ以テ、學ブ能ハズ、一謂フ者、何
ゾ慨然トシテ自ラ奮ハザルヤ。